



『ジャリン子チエ』 考察

ミナミの民

序文

これらの文章は、たぶん2001年頃に、朝から晩まで『じゃりん子チエ』のことばかり考えていた頃に書いた文章を集めたものです。

大阪、それも南海高野線沿線で育った僕は、子供時代を『じゃりん子チエ』の世界の中で過ごしました。

大人になってしばらくして、熱病のように読み返した時期があり、改めて『チエ』の笑いとペーソスの世界に魅了されて、これらの文章を書きました。

『じゃりん子チエ』だけでなく、はるき悦巳先生の他の作品についても触れています。

今読み返すと気恥ずかしさに襲われるばかりですが、あの頃の自分を成仏させる意味でまとめました。

2013年4月18日

ミナミの民

ヨシ江はんはいつ家出したのか？

単行本第4巻「ポートルースの場外乱闘の巻」でヨシ江は「今年の冬はこれまでの冬とは違って...」と言っているので、ヨシ江が家を出ていた期間は少なくとも足掛け2年に及ぶと考えられる（1年だとすれば「これまでの冬...」ではなく「去年の冬...」という表現になったと考えられるため）。

となると、チエが4年生の冬はもちろんヨシ江は家にいなかった。上の理由から、3年生の冬もいなかったことになる。

さらに、テツはチエが5年生なのに4年生だと思いこんでいる場面が何度かあることから、テツにとってはチエが4年生の頃のインパクトが一番強かったのだろうと考えられる。

これは憶測の域を出ないが、ヨシ江が家を出たのはチエが3年生の冬（おそらくは1月か2月）のことだったのではないか。

小学校3年生の娘を一人、バクチに明け暮れる夫のもとに残して出て行くというのは、ヨシ江の性格上きわめて考えにくいことである。

当初、ヨシ江はチエを連れて出て行くことを考えただろう。次の策は、チエをオバアはんの家に預けることだったと思われる。

しかし、これはどちらもチエの反対にあって実現しなかった。チエが「ウチが店をやりながらテツを養っていく」という悲愴な決意をしたためである。

『じゃリン子チエ』はチエが5年生のときの物語だが、本当にチエが「日本一不幸な少女」だったのは、チエが4年生のときだろう。ヨシ江はいない、テツはバクチとケンカに狂う毎日、小鉄もいない、ヒラメちゃんもいない...。もちろん花井もお好み焼き屋もカルメラもいない。慣れない手つきでオバアはんにならったように毎日ホルモンを焼き、客の相手をするチエ。

テツに隠れてたまにヨシ江と会っていたとはいえ、あまりにも哀しい生活ではないか。

そのへんをまともに考えていくと、「元気やないと生きていけんもん」とか、あとになってでてくる「自殺せんと生きてこれたんも...」とか「土壇場で踏ん張れてるのは人間の力だけやのうて...」というチエのセリフも凄みを持ってくる。

ヨシ江はんはなぜ家出したのか？

これについてはさまざまな見方がある。例えば、長尾剛氏は『じゃリン子チエという生き方』という著書の中で、ヨシ江の家出について、テツに自分なしでは生きていけないということを自覚

させ、テツのバクチ好きをもう少し押さえるための計算ずくの行動だったと断じている。他にも、テツにショックを与えるためにオバアはんとチエによってそそのかされたという見方もある。さて、真相は何か。

当事者であるヨシ江の発言を見ていこう。

「一人で生きていけるなんて思っていると、辛抱せなあかんときに辛抱がきかんようになってたりもするんよ」（第4話『秘密のデート』）

（テツの出て行けという言葉について）「お母さん、あの人、口癖やったんですわ…本気で聞いた私も悪い思ってますねん」（第6話『テツの薬はゴロンパー』）

「お母はん、なんであんなことしたんやろ…アホやね、チエと会えんつらさがちよっとも分かってなかったんやね」（第48話『ボートレースの場外乱闘』）

これらの言葉はいずれも、ヨシ江の真情の吐露と考えると差し支えないと思われるので、ヨシ江の家出という行動は、「出て行け」というテツの口癖を「本気で」聞いてしまった結果、おそらく半ば衝動的に取られたものだということが分かる。そのときのヨシ江には「一人で生きていける」という気持ちがあったと告白していることから、たぶん本気で離婚することを考えていたのだろう。

その後の『チエ』の中で見られる、淡々として物事に動じないヨシ江のイメージからは想像しにくいことだが、これらの告白から判断するなら、家出当時のヨシ江は、どちらかというところ衝動的で感情の赴くままに行動する、独立心の強いタイプの女性だったのだと考えてよい。

つまり、後の「鉄の女（テツの女ちゃうで）」ヨシ江のイメージは、「素」ではなく、むしろ家出という苦い教訓から学んで身につけた「作られた」人格なのである。実際、家出から帰ってきたヨシ江は「お母はん、チエ見て勉強してるんよ」と語っている（第2巻『賭け野球その1』）。

ヨシ江はんとは何なのか？

さて、淡々として物事に動じない賢い女性というヨシ江のイメージは「素」ではなく、ヨシ江が家出という苦いレッスンから学んで身につけた「作られた」人格だと述べた。

そして、家出した当時の「素」のヨシ江は、どちらかというところ衝動的で感情の赴くままに行動する独立心の強い女性だっただろうとも述べた。

そう考えて行くと、花井先生の力添えがあったとはいえ、テツと結婚するという相当な「無茶」

をやったのけ、さらに小学生の一人娘を残して家を出て行くという二重の「無茶」を敢行したヨシ江という女性は、ある意味で、怖いもの知らずで無鉄砲なところのあるチエの未来の姿を現していると言えないだろうか。

ヨシ江自身、中学生のときには、周囲の男達を押しつけて地区対抗リレーでアンカーを務めるほどの男まさりで、幼いときに両親を亡くして相当な苦勞を味わっている。また、後にテツとデートするときには否応なく主導権を握ってしまう芯の強い性格であり、表面に表さないだけで、たくましさではチエにまったく引けをとらない。

そういう意味で、ヨシ江はあらゆる点でチエのよき先輩であり、チエがヨシ江をこの上なく尊敬するのも当然だろう。ヨシ江はヨシ江で、チエの中に小さい頃の自分自身を見ているのかもしれない。

追想：ヨシ江はんの家出の巻

夜。

ホルモン焼き屋「テッちゃん」。

奥の座敷で晩ご飯を食べるヨシ江とチエ（小学校3年生）。

ヨシ江「...チエ、明日から学校やね」

チエ（笑顔で）「うん。冬休みってほんま短いわ。つい昨日まで正月やったのに」

ヨシ江「.....」

チエ「それにしても、お父はん、まだバクチ打ってるんやろか。正月から出て行ったきり戻って来えへんけど」

何か黙って考え込む様子のヨシ江。

チエ「お母はん、どないしたん？」

ヨシ江「.....」

チエ「お父はんのこと考えてるん？」

ヨシ江「...チエ、オバアさんのとこでしばらく暮らしてみる気ィあるか」

チエ「なんで？」

ヨシ江「.....」

「こんばんは一」

オバアはんが店に入ってくる。

部屋をのぞいて一言。

「テツはまだ戻ってませんか」

チエ「正月から泊まりこみでバクチ打ちに行ってるわ」

ヨシ江「これ、チエ...」

オバア「まったく、あのアホ...」

チエ「勝つまで戻って来えへんゆうてたから、ずっと負けてるんとちゃうか」

オバアはん、部屋の中に入ってきて、ヨシ江に目配せしながら、チエとヨシ江の間に座る。

（ヨシ江の方をちらちら見ながら）「チエ、実はな...」

チエ「...お母はん、家出するの？」

ヨシ江・オバア「！！」

チエ「そのほうがええわ。お父はん、ちょっとは懲らしめたほうがええ。このままやとお母はんがかわいそうや」

ヨシ江「チエ...」

チエ「お母はん、こないだからカバンに荷物つめとったやん」

ヨシ江「.....」

オバア「チエ、しばらくわたいらの家においで...わたいらと一緒に住もうや」

チエ「.....」

ヨシ江「.....」

チエ「お母はん、一人で暮らすの？」

ヨシ江「チエ、明日からお母はんと一緒に住むか...チエさえよかったら」

考え込むチエ。

* * *

狂喜の叫びを上げながら走ってくるテツ。

「ヨシ江ー！ チエー！ ワシ、やったんやー！」

「一生一代の大バクチに勝ったんやー！」

店に駆け込む。

「ヨシ江ー！ もうホルモンなんか焼かんでもええどー！ 明日からワシがシアワセにしたるからなー！」

「.....」

何の返事もない。

「チエー！ とりあえず回転焼おごったるどー！ 明日は天井…」

部屋の戸をガラッと開けるテツ。

誰もいない部屋。

「……」

「なんや……このうすら寒い雰囲気はなんや」

部屋の中に立ち尽くすテツ。

* * *

次の日の朝。

手に荷物を下げて歩くヨシ江。

その横を歩くチエ。

チエ「…お母はん、ウチら、どこに住むの」

ヨシ江「……」

チエ「どっか遠いところ？」

ヨシ江「ちょっと電車に乗るけど、そんなに遠くやないよ」

チエ「お父はんには、もう会われへんのん？」

ヨシ江「…そんなことないよ」

チエ「お父はん、一人で大丈夫かなあ…」

ヨシ江「……」

* * *

オバアはんの家。

座敷に座る、オバアはん、オジイはん、テツ。

テツ「…どうゆうことですねん」

オバアはん「自分の胸に手エあてて、よう考えなはれ」

テツ「ヨシ江、どこ行ったんや」

オバアはん「あんたにゆうことおませんやろ」

テツ「…チエも一緒か」

オバアはん「そうや」

テツ「…チエはワシのところに置いていってくれ」

オジイはん「おまえ、一人でちゃんと店やれるんか」

オバアはん「やれるわけおまへんやろ…やれるくらいやったら最初からこんなことになってまへんわ」

テツ「…チエはワシと一緒に住みたがっ取るんや」

オバアはん「あんたとチエを二人で住ませるわけにはいかん…チエがあまりにも不憫や。だいち、どうやって暮らしていくつもりや」

テツ「…ワシ、一家のシアワセのために正月から寝んと頑張ってたんや」

オバアはん「バクチなんかで生活していけるかい！ あんた、まさかチエに店やらせるつもりやないやろな」

立ちあがるテツ。

「くそー！ ワシ、もう本格的にグレたど！」

オジイはん「テツ…どこ行くんや」

テツ「酒や！ 酒呑みに行く！」

オジイはん（テツにすがりつきながら）「やめ！ それだけはやめ！」

テツ「うるさい！ 呑まなやっどれるかい！」

オジイはんを振りきって出て行くテツ。

オジイはん「おまえ…ほっといてええんか。あいつ、あれで酒呑むようになったらほんまに終わりやど」

オバアはん「呑みたくても呑めませんわ、あの男は…これ以上グレようがありますかいな。…根性あったらいっぺん一人で生きてみい」

* * *

夜。

ひょうたん池。

ケンカの後で、ボロボロになったテツ。赤い顔でベンチに座っている。

ベンチから地面に転げ落ち、うずくまって地面を思い切り殴りつけるテツ。

「くそー！ くそー！」

「ヨシ江のボケー！ チエのアホー！」

疲れきって、そのまま横になる。

……

立ちあがり、ふらふらした足取りで家に向かう。

* * *

店の前で立ち止まるテツ。中に灯りがついている。

「まさか、クソババやないやろな…」

おそるおそる戸を開けるテツ。

「！」

雑巾で独り店の机を拭いているチエ。

「テツ…なんちゅうカッコしてるねん。またケンカしてきたんか」

「チエ…」

「そんなとこ立ってんと、手伝ってや…明日から二人で店やるんやで」

「店？」

「お母はんはもうおれへんからな…ウチとテツでやらな、誰がやるねん」

「……」

「なんや、情けない顔して…そんな顔してたらお客さん来えへんようなるで」

「チエ！」

泣きながらチエにすがりつくテツ。

<チエのモノローグ>

お母はんには悪いことしたけど…テツ、一人では生きていけんからな
それにしてもこれからどうなるんやろ…

ウチ、もしかしたら日本一不幸な少女なんとちゃうやろか…

あかん、明日のことは明日考えよ

明日になったら元気出る きっと明日になったら…

番外編 追想：ヨシ江はんの家出の巻 終わり

オバアはんとチエ

チエの人格形成に最も影響を与えているのは、テツでもヨシ江でもなく、オバアはんであるということは、『じゃりん子チエ』を読みこんだ読者には誰にも明らかだろう。

チエはなにかにつけ、「オバアはんがこうゆうとった」と言うことで自分の言動の正しさを裏付けようとする。チエにとってオバアはんの言葉は行動の指針であり、オバアはんはその確かな判断力を頼ることのできるほとんど唯一の大人なのである。

いわゆる細かな生活の知恵から深い人生訓（「ひもじい、寒い、もう死にたい、不幸はこの順番できますのや」――単行本第5巻「大阪カブの会」の巻参照）にいたるまで、オバアはんによるチエの教育は全人格的なものであり、チエにとってオバアはんはまさに人生の師と呼ぶにふさわしい存在である。

口では「テツを信用したれ」と言いながら、結局テツを一番信用していないオジイはんとは違って、オバアはんはテツを全身で引き受けている。そして、テツを一番信用しているのは、いや、正確に言えば、テツがどの点において信用でき、どの点においてまったく信用できないかを最も熟知しているのは、花井拳骨を除けば、オバアはんをおいて外にない。

ヨシ江が家出したとき、チエが生きていく上で頼ることのできるのは、オバアはんしかいなかった。チエにホルモンの焼き方を教えたのはおそらくオバアはんであり、チエに店をやらせる決断をしたのもオバアはんだった。将来は、オバアはんが毎年寝込むほど頭を痛めている税金対策のテクニックもチエに伝授することだろう。

いってみれば、チエが日々直面する現実的な問題への対処のしかたは、オバアはんから完全に受け継いだものであり、チエはそのやり方が正しいことを確信している。それが最も端的に現れているのはテツに対する態度である。

しかし、チエはその一方で、テツの母親であるオバアはんの人格に対して、ぬぐいようのない不信感を抱いている。「テツがあんなふうになったのは、オバアはんの教育が悪かったからとちゃう？」とチエに質問されるたびに、オバアはんは返す言葉がなくなり、話題を逸らしたり、甘いものを食べに行ったりして誤魔化すしかなくなるのだ。

これは明らかにチエの質問が核心を突いているからであり、オバアはんもそれを自覚しているからである。チエはオバアはんをただ尊敬しているのではない。その欠点をも鋭く見抜いている。

それは、あえて一言で言えば、オバアはんの持つ「テツ的なもの」である。オバアはんは、若い頃にはおタカはん（ミツルの母親）やレディー幕ごはんらと一緒に、不良たちとケンカする毎日を過ごし（単行本第9巻「レディー幕ごはんの夢」参照）、近所のヤクザをどついで無理矢理「西萩小町」と呼ばせたりしていた（単行本第11巻「西萩小町へのラブレター」参照）。いまでもパチンコが大好きで、チエを連れてよく打ちに行く。

テツのケンカ好きはまぎれもなくオバアはんから受け継いだものであり、テツが定職につかずバクチとケンカにのめりこむようになったのも、小さい頃からのオバアはんの暴力による抑圧生活の反動と言えなくもない。

そういう意味で、オバアはんはまぎれもなくテツの母親なのである。そして、チエは自分の中にもある、その「テツ的（オバアはんの）なるもの」にある種の嫌悪感を抱いている。しかし、それはチエの血の中に厳然として存在するものなので、生活の端々において抗しがたく表出する。そんなチエの一面を相殺はしないにせよ、フォローする効果を持つのは、チエがヨシ江から受け継いだ（あるいは受け継ぐことを目指している）優しい気配りのできる性質である。これがもっともよく現れるのは、チエのヒラメちゃんに対する態度である。

チエは一見自由奔放に振舞っているように見えながら、実は常に周囲の者たちに細かく気を遣いながら生きているのだが、そういうことのできないオバアはんは、ときどきチエに説教されることがある。特に、店での客の扱い方にかけては、チエの方が何枚も上手である。

オバアはんとヨシ江

通常の嫁姑の関係とは異なり、オバアはんは、ヨシ江には頭が上がらない。それは、「わたいの生んだ人類の恥」の嫁としてテツの面倒をみてもらっているという負い目に加えて、先に述べたように、ヨシ江がオバアはんの持っていない人格的な美点を備えているからでもある。

テツは決してオバアはんに勝てないが、それはパワーで勝てないのではなく、精神的な理由による（単行本10巻第8話「人間の戦い」参照）。それと同じように、オバアはんは精神的に（人格的に）ヨシ江に負けることを認めざるをえないのである。

しかし、オバアはんはヨシ江がただの良妻賢母だとは思っていない。チエはヨシ江に「ふつうの」女性であり母親であることを切に望んでいるのだが、オバアはんはヨシ江が決して普通の女ではない（決して悪い意味ではないが）ことを長年の付き合いから知っているのだ。その証拠に、オバアはんがテツを生んだときと同じように、ヨシ江がチエを生むときにまったくツワリにならなかったことを聞いてショックを受けたチエが、「お母はんはふつうやのに…」と言ったとき、

オバアはんは「わかりまへんでえー。普通でテツみたいなモンとはなかなか付き合えまへんでえー」と半ば冗談、半ば脅すような口調で語っている（単行本第16巻第3話「テツのお手伝いさん」参照）。

テツとヨシ江は結婚するまで10年以上付き合っていたので、その間オバアはんはヨシ江の性格を深く知る機会もあったことだろう。ヨシ江とオバアはんとのつきあいは、少なくともチエよりも10数年は長いから、オバアはんはチエの知らないヨシ江の側面についても色々知っているに違いない。

オバアはんとおジイはん

オバアはんについての最大の謎は、彼女の夫であるおジイはんとの関係である。なぜオバアはんはおジイはんのような男と結婚したのだろうか？ 二人の間に夫婦の愛情というものは存在するのだろうか？

作品の中ではっきりとは語られないが、おジイはんはどうやら養子のようなものである。オバアはんの方が明らかに強力なのは、性格的（腕力的？）な要因だけでなく、立場的な要因もあるように思われるからだ。ホルモン屋を始めたのはオバアはんの代からである可能性が高いが（この理由については別の機会に述べる）、オバアはんの実家におジイはんが入る形で婿入りしたのだろう。

二人の関係は終始オバアはんがリードしたに違いないので、見合いにせよ恋愛にせよ、オバアはんがまずおジイはんを惚れたと考えてよい。しかし、結婚した後は、生活力がなく口先だけのおジイはんを幻滅する一方だった。テツを生んでからは、もはやおジイはんには店の共同経営者として以外には何も期待することがなくなり、諦めと倦怠の中で生活を続けている...

さて、おジイはんはどうか。おジイはんは、同様の倦怠の中にありながらも、いまだに将来について一縷の望みを抱いている。それは、テツとヨシ江が「雪解け」して、チエと3人で（さらには老夫婦を含めて5人で）シアワセな家庭生活を築き直すのではないかということだ。しかしそんなものがただの幻想でしかないことに、すべての女性陣は気づいている。

さらに、「西萩小町」に来たラブレターを読んで喜ぶオバアはんを見て本気でヤキモチを焼くところから考えて（単行本11巻「西萩小町へのラブレター」参照）、おジイはんはいまだにオバアはんに対して男としての愛情を抱いている。

こうしたことから判断するに、おジイはんはいくつになっても「夢見る男」の典型のような人であり、若い頃には非現実的な妄想に身を焦がす一人の熱い理想主義者（ロマンチスト）だったのではないだろうか。オバアはんはそういうおジイはんの側面に惚れたのかもしれない。

ここで思い出すのは、はるき悦巳の名作『日の出食堂の青春』のヒロイン、ミッチャんの母親による次の心に残るセリフだ。このセリフ、オバアはんの口から漏れたとしても全然違和感がないと思うのは私だけだろうか。

「男は夢ばかり見てますからな。あれがしたい、これがしたい、他にまだやりたいことがある。それが男の遊びですわ。ええかげん、ボロボロなって女のもとに帰って来たりしますのや。女はたまりませんわ。…女にくらべたら、男の夢なんて、つまみ食いみたいなもんですわ」

(『日の出食堂の青春』第6話「男としての忠告」より)

チエは美人か？

まず、もっとも瑣末な（？）問題から始めよう。

チエは、美人なのか？ あるいは、将来、美人になるのか？ それとも...？

テツとヨシ江という、「美女と野獣」の組み合わせによって生まれたチエという子は、はたしてどちらの容姿をより強く受け継いでいるのだろうか？

これは、チエ本人を深く悩ませた問題でもあった。言うまでもなく、単行本第7巻の「イデン」のエピソードがそれだ。マサルからの手紙をきっかけに始まったこの事件は、父兄運動会におけるヨシ江の大活躍をもって無事決着するのだが、はたしてそれをもって決着と呼んでよいものかどうか、疑問が残るところではある。

というのは、確かにチエの足の速さはヨシ江の遺伝だとしても、それをもってチエの容姿もまたヨシ江の遺伝と言いきることはできないからである。

実際には、チエの容姿がテツとヨシ江のどちらに似ているかについては、このエピソードだけでは結論が出ない。マサルはチエの顔がテツにそっくりと手紙の中で断言しているし、チエ自身鏡を見ながら、自分の笑顔がテツそっくりであることを認めて愕然としている。一方、ヒラメは校庭でチエを眺めながら、「チエちゃん美人になるのとちゃうやろか」とつぶやいており、小鉄も、「チエちゃんの横顔はお母はんにそっくりや」と言っている。つまり、どちらの見方も等しく存在するのだ。

そこで、それ以外の箇所から、第三者の証言を拾ってみることにする。

チエ「ウチ、よう似合うとるやろ」

ヨシ江「ウン…かわいい」

チエ「そら、お母はんがつくってくれたんやもん、似合うてあたりまえや」

ヨシ江「モデルがええんよ、チエ、きっと美人になる」

チエ（テレ笑いしながら）「そうゆうのお母はんだけ…」

（第一巻「秘密のデート」より）

ジュニア「…えらい、すましとるなあ」

小鉄「晴れ着のせいや。服装で人間は変わるんや」

ジュニア「そやけど、つくづく見たら、けっこう見れる顔しとるやないか」

小鉄「失礼なことゆうな」

（第五巻「お正月には初詣」より）

(チエのモノログで)「店のほうでときどきボスの弟の酔っ払った声が聞こえてきた 『テ
ッちゃんと別れる!』とか『ウチがお母はんに似てブスだ』とか…」

(第五巻「内股がやってきた オエ」より)

レディー幕ごはん「チエちゃんいいますんやてなあ…子どもの頃のキクちゃんにそっくりです
がな」

(第九巻「レディー幕ごはんの夢①」より)

ミツルの上司の警察部長「しかしあの子はええ子やないか」

ミツル「そうですね、ボクも美人だと思います」

部長「うん、たぶん美人なるやろ」

(第一〇巻「部長さんの恋」より)

アケミ「チエちゃん…?」

チエ「え…?」

アケミ「…似てるわねえ。テッちゃんよりヨシ江のほうね」

(第二十巻「あのときの『泣き別れ法善寺』」より)

以上、思いつくままに抜き出してみたが、大方はチエが美人である(ヨシ江似である)と認めて
いる。レディー幕ごはんは、チエが小さい頃のキク(オバアはん)そっくりだと言っている(そ
してチエは慥然としている)が、彼女はヨシ江のことを知らないので、ヨシ江を見ればチエはヨ
シ江に似ていると言うかもしれない。

さらに、マサルはチエがテツそっくりだと手紙の中で言っていたのだが、父兄運動会の後では「
チエは大人になったらお母はんみたいになるんや(だから悪口を言っても怖くない:筆者註)」
と言って喜んでいる。

そして、チエ自身は、笑顔がテツ似であることを知って愕然としながらも、それ以外の表情は「
どう考えても似てない」と言って安心しているのだ。

ここでもう一つ重要な事実がある。

チエその後、ヨシ江に笑顔を作って見せるよう頼むのだが、ヨシ江の上品な笑顔は大口を開けて
笑うチエの笑顔とは全然違うので、チエががっかりする場面がある。しかし、実はヨシ江はチエ
のように大口を開ける表情もできるのである。ヨシ江は、テツの前でだけその表情を作って見せ
ている(第一七巻「捨丸のオミヤゲ」参照)。

以上長々と述べてきたが、チエの容姿はヨシ江似であり、したがって将来はヨシ江のような美人
になるだろうことは、『じゃリン子チエ』のどの巻でもいいから適当に開いて見ればわざわざ論

証せずとも明らかだろう。百論一見に如かず、である。

チエは男運が悪いのか？

かくのごとく、美しく魅力的な(!)チエであるが、本人はたびたび「男運の悪さ」を嘆く場面がある。第一巻の第一話でいきなり「ウチは男運が悪いねやろか…ロクな男が集まらん」とぼやいている。ヨシ江にも、「ウチ、世の中の男には絶望してるねん」と言いきっている。

確かに、チエの周りの男を見てみると、テツ、オジイはん、お好み焼き屋、カルメラ、マサル、タカシ、コケザル、丸太（ヒラメの兄）…チエの発言も無理もないという気がする。チエにはやはり男運がないのだろうか。

しかし、チエの周囲には、そこんじょそこらにはいないほどすぐれた、こう言ってもよければ「偉大な」男たちもいる。その一人は、日本を代表する李白研究者で、孤高の大学者、花井拳骨である。そしてもう一人(?)、もっとも身近にいる、男の中の男、小鉄という存在を忘れてはいけない。

この二人こそ、本当の意味での「漢（おとこ）」であり、この両者から共に慕われているチエという女は、決して男運が悪いとは言えないだろう。もっとも、二人ともチエの恋愛対象には絶対になり得ないのが残念なところだが…。

チエの好みのタイプはどんな男か？

「ウチ、お嫁には行かん」とヨシ江の前で言いきるチエだが（第一巻「秘密のデート」）、その一方で、「ウチがお嫁に行ったらテツどうなるんやろ…」と思いを悩んだりもしている（第一巻「チエちゃん登場」）。情けない男どもにあいそをつかしつつも、頑なに一生独身を貫くつもりはないようである。

とすると、チエは将来、どんなタイプの男性に惚れるのだろうか？

チエが白馬の王子様を夢見るような女ではないことには誰もが同意するだろう。すでに十一歳にして男の弱さや情けなさを知り尽くしているチエは、男に幻想を抱くことは将来も決してないだろう。地位や名誉や金を持つ男に引かれる傾向や玉の輿を目指す姿勢も皆無と言いきってよい。

ここでもう結論に入ると、私の独断と偏見では、将来チエが惹かれそうな男は次の二つのタイプのいずれかだと思う。

まず、花井渉タイプ。

まじめで、誠実。悪いことは決してできない。気は優しく、小心者ではないが、他人からよく言えば安心され、悪く言えばなめられるタイプ。しかし、自分の意志というものをしっかり持っていて、これと思ったことは曲げないところもある。

チエは、ヒラメと一緒に、何度かセンセの話題でよく顔を赤らめながら語り合っている。単行本第十巻の、「センセのデート」以下のエピソードがそうだし、第一六巻の「朝子さんのツワリ」のエピソードもそうだ。そこには、恋愛感情の萌芽のようなものが見られなくもない。

次に、ずばり竹本テツタイプ。

乱暴で、ケンカ好きで、メチャメチャなところがあるが、女に関しては照れ屋で、極端なまでに純情なところがある。生活力はないが、いざというときには常人離れした馬力を発揮する。一人では決して生きていけないくせに、男としての見栄にこだわる。

チエは第一巻ではやくも

「テツ、一人では生きていけないのや…あれでけっこうええところもあるからなあ」（「秘密のデート」）と言っており、テツとヨシ江が結婚した理由について考えながら、

「テツ、あれで意外に女にもてるところあるんやろか…そうゆうたらウチもテツきらいやないもんな」とつぶやいている（第四巻「その関係がわからない」）。

将来、チエが大人になれば、チエにテツの魅力がもっとわかってくるかもしれない（テツの魅力については、「考察：テツ」に詳述の予定）。

この二つのタイプ（花井渉タイプと竹本テツタイプ）は、非常に対照的でありながら、一つ共通するところがある。それは、絶対に浮気の心配がないという点だ。

チエが将来どちらのタイプを選ぶかは分からないが、後者を選んだ方が面白い人生になることだけは確実だろう。そういう設定なら、『大人になったチエ』の続編も描けそうだ。

『日の出食堂の青春』について

- 第一話 目撃
- 第二話 ヤーさんが来る
- 第三話 迫丸のアパートにて
- 第四話 ざざ降りの四人
- 第五話 ミッチャんの結婚
- 第六話 男としての忠告
- 第七話 ヤケクソ・パーティ
- 第八話 日の出食堂の青春

『じゃりん子チエ』の作者はるき悦巳による、タイトル通り「青春」をテーマにした、八話からなる短編。描かれた時期は、『チエ』の連載開始直後と重なっている。ある意味で、はるき悦巳が漫画家として最も充実していた頃の作品と言えるかもしれない。

今では入手しにくい作品でもあるので、ストーリーの骨格をやや詳しく説明しておく。

「日の出食堂」は大阪の下町にある大衆食堂で、中年の夫婦が元気に運営している。しかし彼らの一人息子アキラは、店を継ぐために高校に進むのを止めたものの、一向に店を手伝う様子もなく、近所の似たような境遇にある3人の仲間達（武、ノブオ、イクオ）とグータラつるんで過ごしている。

彼らには、共通のアイドル、ミッチャン（吉田美津子）という女性がいる。ミッチャンの家は、母一人子一人で、豆腐屋をしている。高校には行かず、今は家の店を手伝っている。4人組が高校にいかなかった本当の理由は、ミッチャンが高校に行かないと決めたからだ。彼等は、中学を出た後も、ミッチャンと仲良く遊びながら、いつか、ミッチャンに好きだと打ち明けようと思っていたのだ。

しかし、男達の幼い空想をよそに、現実派のミッチャンは、迫丸君という中学時代の同級生と付き合い始めた。迫丸は、中学時代には、皆から怖がられていて、ヤクザともつきあいがあり、教師を殴って無期停学をくらったこともある完全な不良だった。

4人は、そんな迫丸がミッチャンと付き合っていることが信じられず、迫丸が嫌がるミッチャンに無理矢理近づいているのだと思っていたのだが、実際には、ミッチャンのほうが積極的だったのだ。

停学処分を受けたために就職口がなかった迫丸に、ミッチャンは卒業式の日を掛け、近所の

豆腐屋の口を紹介してやった。そのことがきっかけで二人は親しくなり、ミッチャンは不良っぽいが純朴なところもある迫丸君のことがすっかり気に入ってしまった。

迫丸は、不良だった自分と付き合っているのを知られたらミッチャンに迷惑がかかるのではないかと戸惑っていたのだが、ミッチャンはどんどん積極的に交際を深めていく。ついには、早く結婚しようと言い出し、心の準備がまるでできていなかった迫丸君はびっくりしてしまう。

事態がそこまで進んでいることをまるで知らない4人は、ミッチャンを喫茶店に呼び出して問い詰めたり、告白しに出かけたりするが、ことごとく空振りする...

といったところがストーリーの基本で、ここに、さまざまなエピソードが絡んで話が進んで行くのだが、それぞれのエピソードの味わいが絶妙で、なんともいえないしみじみとした読後感が残る。

さて、この作品がそれ自体として独立した素晴らしい名作であることに疑いの余地はないのだが、はるき悦巳のもう一つの不滅の傑作『じゃリン子チエ』をこよなく愛する私としては、どうしても気になることがある。そこで、今回はその点についてやや突っ込んで考えてみたい。

それは、この作品のヒロイン、吉田美津子が竹本チエの未来の姿なのか、あるいはどこまでミッチャンはチエの未来の姿に重なるのか、ということだ。

まず、外見的には、チエが成長したらミッチャンのようになることはほとんど確実のように思われる。横顔、髪型（チエのポッチリの代わりにミッチャンはバンドで髪を房をつくっている）はそのままチエを彷彿とさせるし、革ジャンに長靴というミッチャンのスタイルも、チエのいつもの服に下駄という姿の発展形という気がする。

それに、ミッチャンは若い頃のヨシ江に似ている（『チエ』単行本6巻「昔のものには思い出が」に出てきたテツとヨシ江の写真を参照）。なによりも決定的なのは、ミッチャンのお母さんがヨシ江にうりふたつだということだ。ミッチャンのお父さんは亡くなっているので話には出てこないが、もしかしたらテツにそっくりな人だったのだろうか。

『日の出食堂の青春』にはテツもちらっと登場するので、舞台は西萩の近くと考えられる。とすると、テツとミッチャンのお母さんが町ですれ違う可能性もあり得るのだが、そんなときテツはどう反応するのだろうか...と、これはまったくの余談。

次に、性格的な面についても、ミッチャンとチエの間には共通点がある。

チエはご存知の通りガッツの固まり、日本一根性のある小学生で、どんな逆境の中でも明るく元気を失わない女の子だ。それでいて、照れ屋で恥かしがりの一面もある。また、大人顔負けの

知恵も身につけているが、子供っぽく素直なところもある。これらの要素のバランスがチエの性格の最大の魅力だ。

ミッチャンは、母一人子一人の家庭で、自宅の豆腐屋を手伝いながら、明るく元気に生きているしっかり者だ。迫丸君がヤクザに絡まれたときには、長靴を投げつけたり、椅子を持ってかかっていったりと、勇ましい一面もある。お母さんの助言に従って、迫丸君にプロポーズしたりするなど、積極的で、自分の気持ちをストレートに表現するタイプでもある。

全体的な印象としては、ミッチャンの方が対人関係に屈託がなく、サバサバしているような気がする。これはミッチャンのお母さんの性格によるところが大きいだろう。ミッチャンのお母さんは、外見こそヨシ江はんそっくりだが、ヨシ江はんなら決して口にしないようなことをはっきり言う人だ。

チエは、父親をはじめ、周囲の人間がかなり変わっているために、年齢には不似合いなほど人間に対してシビアな目を持っている。また、控えめで優しいお母はんと、本質的には照れ屋の父親の影響で、おくてではにかみ屋のところもある。チエは将来ミッチャンほど男性に対して積極的になることはないような気がする。しかし、もしかしたら、ヨシ江はんのように、これと思った男は有無を言わずモノにするかもしれない。

...以上、つらつらと妄想めいたことを書き連ねてきたが、要するに、私としては、『日の出食堂の青春』を一刻も早く再刊すべきだということが言いたいのです。

2001.2.23しるす

『ガチャバイ』

「『ガチャバイ』ちゅうのは、そやな、どおしようもない奴らのことやねん。」――はるき悦巳

『ガチャバイ』は上下2巻に分かれている。この二巻で物語全体が構成されていることは間違いないのだが、描かれた時期に17年以上のブランクがあるため、上巻と下巻を少し分けて考える必要がある。

上巻が描かれたのは1980-82年で、『じゃリン子チエ』の初期。『日の出食堂の青春』とも一部重なっている。漫画家はるき悦巳の才能が全面的に開花した時期にあたる。

下巻が描かれたのは、20年におよぶ超大連載となった『じゃリン子チエ』終了後の1998年である。

だから当然、この二巻の間には作画や筋書きの運び方などの点で顕著な違いが見られる。それは大体において初期『チエ』と後期『チエ』との違いに通じているのだが、ここでそのことについては詳しく触れまいと思う。ただ、以下に述べる『ガチャバイ』についての感想は、主に上巻を念頭に置いたものであると考えていただきたい。

「ガチャバイ」という言葉が一体何なのかについては、冒頭のはるき悦巳自身のコメントがある。しかし「ガチャバイ」が誰を指すのかについては、読者にはにわかには判然としない。

ガチャバイという言葉は、作品中ではただ一度使われるだけだ。それは、作品の最初の頃に高利貸しの黄ィやんが主人公の咲に向かって「このガチャバイ！」と怒鳴る場面である。

主人公の咲は、頭がまわり、行動力もある、自他ともに認める「大物」少年で、その生い立ちは謎に包まれている。その咲を頼りにする少女ゴマメは、母親が妹を連れて夜逃げ、何もせずグータラしていた父親も蒸発してしまうという不幸な境遇にありながらも、けなげに生きている。

作品を読み進めていくうちに、読者は、同意せざるを得ない。この二人は、どう考えても「ガチャバイ=どおしようもない奴ら」ではない、と。

どおしようもないのは、むしろ彼らを取り巻く大人たちの方だ。そして咲は、そうした大人たちを利用しながら彼の計画を着実に実現していく。

この、終始咲のペースで進められる一連の出来事が『ガチャバイ』のストーリーの柱なのだが、そのストーリーの陰に隠れているさまざまな人間模様がなんともいえず絶妙で、いくらでも深読みできそうな豊かさを備えている。

しかし、ここではストーリーそのものについてはこれ以上言及しない。この単行本はまだ絶版ではない(!)ので、興味を持った方は是非ご自分で入手して読んでいただきたいと思う。漫画の単行本としてはいくらか高めだが(各巻とも1,000円強)、それだけの価値のある内容である。特に上巻は傑作と言って差し支えないと思う。

さて、例によって、ここでつらつらと考えてみたいのは、漫画界に屹立する金字塔『ジャリン子チエ』との関わりである。

咲という少年は、チエをスーパー少女とするなら、スーパー少年である。つまり、明らかに常人のカテゴリーを超えた存在だということだ。（といっても、SFではないので、あくまでも見てくれはただの少年少女だが。）しかし『チエ』には、テツや小鉄をはじめ、単独でも十分に主役をはれるキャラクターが何人もいるが、『ガチャバイ』には咲しかいないので、よけいにその存在感が際立つ。源さん、清やん、黄ィやん、ゴマメ、勘公、そして土佐犬の雷電といったところもみな、魅力あるキャラクターではあるが、咲のカリスマ的な魅力には及ばない。

それにしても、である。なぜ、咲の顔はあそこまでマサルとうりふたつなのだろうか？

ここからは私的な妄想モードに入る。

もしかしたら、はるき氏は、マサルに主役をはらせたかったのではないだろうか？

つまり、咲は本当はマサルなのだ！

この『ガチャバイ』という作品は、主人公マサルのために描かれた一大叙事詩だったのである。ふだん『チエ』の中では、本当の実力と魅力を存分に発揮する前にチエによって粉碎されてしまい、脇役の座に甘んじ続けてフラストレーションがたまっているマサルに、活躍の場を提供するために描かれたのがこの『ガチャバイ』なのだ。

そう考えれば、なぜこの作品の中で咲の役がこんなに「おいしい」のかの理由がはっきりする。なんせ、咲は、マサルが憧れるであろう「オットコ前な少年」をすべての面で体現しているのだから。

『ガチャバイ』の中で「オットコ前な少年」を見事に演じきったマサルは、心の中でこう叫んでいるに違いない。

「チエー！ オレ、カッコええやろー！ 見てくれー！ チエ、オレのカッコええとこ見てくれー！」

「そんなことゆうたら全部ぶちこわしやんか……。」（チエちゃんより）

最後に、咲以外のキャラクターについて一言。

まず、勘公とそのお母はん。

子どもの頃のテツと、その頃のオバアはんにそっくりで笑える。たぶんこんなんやったんやろなあ…。テツはもっと性格もケンカも強かったと思うけど。

清やん（清次）。

姿形は、お好み焼き屋のオヤジ（百合根）そのもの。闘犬が生きがいで土佐犬の雷電に思い入れのあるところなど性格も似ているが、話が進むにしたがって、だんだん小ずるい小物ぶりを発揮

する。

黄ィやん。

本当なら悪役と呼んでもいいような役柄だが、咲の手にかかっては同情すべき被害者の様相さえ呈する。こういう人物さえ愛すべきキャラクターにしてしまうところがはるき悦巳のすごいところ。

源やん。

わけあって咲の面倒を見ている腕っ節の強いじいやん。物語の最後まで一貫して咲を暖かく見守る、出色のキャラクター。なにわ人情コメディ『ガチャバイ』のもう一人の主役だ。

ゴマメ。

はるき氏はあるインタビューの中でゴマメを「ヒラメに似たキャラクター」と指摘され、「いつも自分の内面を見つめているような子は、描きやすい」というようなことを述べていた。この子には絶対にシアワセになってもらいたい。もちろん咲と一緒に。

雷電。

小鉄に比べると、頭もよくないし人間的な(?)成熟度にも欠けるが、はるき悦巳の生んだ愛すべき動物キャラクターである。はるき氏は、「猫ばかりやとアホのひとつ覚えと思われるから」犬も出してみた、らしい。

単行本『舌町物語』

莊久一作・はるき悦巳画（双葉社、絶版）

はるき悦巳の初期作品が収録された単行本。いずれも1978年に各種雑誌に掲載された作品をまとめたもの。もはや絶版で、きわめて入手困難な本だが、率直に言って、よほどのコアなはるき悦巳ファンでない限り無理に手に入れる必要はないと思う。ここには、のちの珠玉の作品群に見られる、泣きながら笑わせる、あの「はるきマジック」は、よく言ってもその萌芽的な形でしか見られないからだ。これらの初期作品を『日の出食堂の青春』や『ジャリン子チエ』と比べることはできない。とはいえ、『チエ』の読者なら、なんらかの機会に目に触れる折があれば、一度は目を通しておきたい作品たちではある。

以下、収録順ではなく、発表順（執筆年代順）にコメントしていく。

『政・トラ ぶっとん音頭』（「パンチ0h!」掲載）

あらすじ：

政吉の父親源ヤンは、猫に三味線の音に合わせて飛びあがる芸を仕込むために熱い鉄板の上に猫を放り投げるといふ荒業を行っていた。政吉はそんな父親に腹を立て、ろくな死に方をしないと怒っていたが、やはり猫が原因で川に落ちて事故死してしまう。

父親の葬式の直後に家を出て姿を消した政吉は、20年後、大人になって再び家に戻ってくる。彼は嫌っていた父親と同じく、シャベルを使った音頭に合わせて猫を飛び上がらせる芸をマスターしていた。家がすでに他人の手に渡っていることを知って愕然とした政吉は、猫のトラと共に大道芸人として縁日巡りの生活を続ける。

そんなある日、道端で政吉の芸を見た放送関係者が政吉にテレビ演芸番組に出ることを強く勧める。乗せられて出演した政吉は、一躍脚光を浴びるスター芸人となり、政吉とトラは全国行脚の公演旅行に出る。

8年の歳月が過ぎ、すっかり有名人となった政吉が、年老いたトラを膝に抱きながら、そろそろ引退しようかなどと考えながら電車に乗っていたある日、政吉を見つけた子供たちがシャベルを振りまわしたためにトラが飛びあがってしまい、トラは電車の窓から落ちて死んでしまう。

意気消沈した政吉は、以後、山中のさびれた旅館「政とら屋」の主人となり、トラの思い出と共に余生を過ごす。

感想：

一読したとき、はっきり言って何が面白いのかよくわからなかった。だが、噛めば噛むほど味の出るスルメのような作品で、デビュー作としては高い完成度を持っている。ユーモアに包まれた中にも、全体に人生の哀愁を感じさせる雰囲気漂っている。この読後感、何か身に覚えがある、とふと思う。考えてみると、たしかに、はるき悦巳が影響を受けた数少ない先達、つげ義春を読んだときと似た感覚だ。似ていると思ったのは、両者の持つ視点である。

淡々として、決して対象にのめりこまない、醒めた視点。しかし、それと同時に、人間の持つ業（ごう）のようなものに対する共感とも憐憫ともつかない暖かいまなざし。

はるきは若い頃、漫画はほとんど読まなかったというが、つげの作品だけは「こんなことを書いてもええんや」と思いながら読んでいたという。おそらくはるきが述べているのは『ねじ式』に代表されるような、それまでの漫画の概念をまったく打ち壊すようなつげの一連の作品のことだと思われる。美大生だったはるきがそうしたシニールで「芸術的」な漫画を面白いと感じたのはよく理解できる。

しかし、はるき作品に最もその直接的な影響が感じられるつげ作品は、むしろ『長八の宿』や『ほんやら洞のべんさん』に代表される、ほのぼのとした中にも哀愁が漂ういわゆる「旅もの」と呼ばれるシリーズである。

実際、この『政・トラ ぶっとな音頭』冒頭の、古い旅館の情景を書いたコマなどは、つげ作品かと思まがうほどだ。背景や建物を細かく書きこむ画風は、初期のはるき作品におけるとりわけすぐれた要素だが、のちに長期連載を持つようになってからは、この特徴は次第に失われていく。

ストーリーの面から言えば、つげに比べると、はるきはより分かりやすいドラマ性に傾いているように感じられる。しかしそれは決して過度に深刻なものになることはない。『政・トラ』とある意味でよく似たテーマを扱っていると思われるつげの『ゲンセンカン主人』と比べればその違いは明らかだ。はるき独特の大阪テイストの「ユーモアと軽み」は実質的なデビュー作であるこの作品ですでに十分に現われている。

『伝説』（「マンガ少年」掲載）

あらすじ：

蛮族に包囲された王国の戦士イシスは、敵の方位網を単独突破して援軍を求める冒険に出ることを決意する。その王国には巨大な岩に彫られた巨人があった。新月に生まれた10歳の少年を生贄に捧げることで動くという伝説があり、何百年前にもそのようにしてこの国を救ったことがあるという。

王国には、その条件を満たす少年である、王子ロトがいた。蛮族の絶え間ない攻撃を受け、国の命運も尽きたかと思われたとき、ロトは自ら巨人を動かすための生贄となることを志願する。

疲れ切ったイシスが、援軍が来る知らせを伝えようと帰途を急いでいると、突然巨大な地ゆれが襲った。国に着いたイシスが発見したのは、荒野にただ一人立ち尽くす巨大な岩の巨人の姿だ

った…

感想：

はるき作品には非常に珍しい（おそらくこれ一作だろう）画風、ストーリーである。彼がこの道を追求めたなら、『ジャリン子チエ』が生まれることは決してなかつただろう。「自分に描ける身近なことしか描かない」と後に語るようになる「はるき悦巳」はここにはいない。つげ義春の影響もここにはない。どちらかと言うと、ほとんど宮崎駿『風の谷のナウシカ』の世界である。

短編として、それなりのドラマ性を備えてはいるが、正直、名作と呼ぶには多少の抵抗がある。というのは、このジャンルには、宮崎駿を出さずとも、さらにすぐれた傑作が多数存在するからだ。

しかし、単なる悲劇ではなく、読者に考えさせるような終わり方、全体を覆う哀感とも諦観ともつかぬ乾いたトーン、そして作品世界を高めから達観したような作者の視点は、はるき悦巳ならではと言えなくもない。

彼がこの作品を描いた動機は何だったのか、何を目指していたのか、興味のあるところだ。なお、この作品については、唐沢俊一著『とても変なまんが』（早川書房）の中でも触れられているので、未読の方は、読むと面白いと思う。

『舌町物語』

（荘久一作、はるき悦巳画「漫画アクション」掲載）

其ノ壱 苦塩（にがり）

其ノ弐 一笑懸命

其ノ参 結界

其ノ四 二人羽織

其ノ五 すいばれ門づけ

其ノ六 涙をヨイショ

其ノ七 千社札

其ノ八 かもしか二人

あらすじ（全体を通して）：

塙甚介は、落語家稼業見習中の19歳の若者だ。豆腐屋に下宿しながら、東西亭鬼太郎という師匠のもとに通っている。「一笑懸命」なのはいいのだが、少し生真面目すぎるのが玉にキズ。鬼太郎師匠の一見意地悪にも見える厳しい指導、鬼太郎の妻、三千奴姐さんの苦くも暖かい励ましと共に、くやし涙と稽古に暮れる毎日。やがては東西亭喜楽大師匠をも巻きこんで、東京下町（浅草）を舞台にユーモアとペーススあふれる人情話が繰り広げられる。

感想：

この作品、原作ははるき悦巳ではなく、画を担当しているだけなのだが、これまでの三作の中ではもっとも後のはるき作品を彷彿とさせる出来になっている。

舞台は東京の下町で、落語の世界をテーマにしているだけに、いかにも江戸的な「粋（いき）」のテイストがふんだんに盛り込まれているとはいえ、作品世界の全体的な雰囲気は大阪の下町を舞台にしたはるきの代表作『じゃりん子チエ』と大いに共通するものがあり、のちの作品に登場するおなじみのはるきキャラクターの原型のような人物も出てくる。

だが、特筆すべきは、はるき悦巳の作品の中には珍しく男と女の「濡れ場」が登場することだろう（とはいってももちろんそのものずばりの描写はないが）。彼の描く女体が見られるのはこの作品だけかもしれない（未確認）。正直に言って上手いとは言えないヌードだ。以後の彼が女体や艶っぽい場面をまったく描かなくなったのは正解だったかもしれない。

はるき悦巳さんは、やっぱりテレ屋さんだと思う。僕などは彼のそういうところが好きだったりする。彼自身がストーリーを作ったら濡れ場やヌードなど決して出てこなかったに違いない。はるき氏の作風は、一見ごちゃごちゃして泥臭いようでも、独特の「品」が備わっている。大阪人でありながら、こういう江戸の人情話が描けるのも、彼が持つ「つつましかさ」と、「引き」のユーモアのセンスゆえだろう。関西の笑いは強引に「押し」で笑いを取りにいくと一般に言われるが、一流の人はみな「引き」の笑いも心得ている。

もうひとつ、この作品に強く現れているはるき世界のキーワードは「純情」だ。

主人公の塙甚介はまったく「純情」を絵に描いたような青年である。純情ゆえに、色んな失敗もする。師匠にからかわれる。姐さんに引っぱたかれる。涙も流す。隅田川に飛びこんだりもする。ここまで直情的な純情青年は、はるき作品には中々出てこない。強いて言えば、『チエ』の中の、ヒラメちゃんのお兄さんマルタ君くらいか。マルタ君はもっともって薄味だけれど、生真面目という点では似ている。

しかし、考えてみれば、はるき作品に出てくる男たちというのはみな「純情」を心の中にマグマのように抱えながら生きている。その最たるものがテツだろう。

『チエ』は青春物語ではないけれども、その中で男たちはいつも青春特有の純情なエネルギーに突き動かされながら走り回っている。マサル然り、コケザル然り、レイモンド飛田然り…。はるき氏は男の純情を重奏低音にしながら『チエ』の中でさまざまなメロディーを編み出し続ける。チエやヨシ江（女たち）は、自分たちがそういう男たちの純情を振りまわしていることに心の底で気づきつつ、男たちが走り回るのを呆れ顔で眺めたり、一緒に走り回ってやったりする。

風呂屋の娘節子さんへの片思いの恋に、ライバルを「ヨイショ」することでケリをつける塙甚

介くんは、それでも九官鳥に「セツコサン アイシテル」とつぶやかずにはおれない。

せつないねえ…。このせつなさは、『日の出食堂の青春』の四人組によって見事に作品化されることになる。「カッコいいことはなんてカッコ悪いんだろう」をひっくり返して「カッコ悪いことはなんてカッコいいんだろう」とひかえめに主張する「はるき哲学（美学）」の完成まではあと一歩だ。

『ドンチャンえれじい』

（「平凡パンチ」掲載、第一回「平凡パンチ劇画賞」佳作入選作品）

あらすじ：

高校の卒業式の日親父が死に、それと同時に家を飛び出したミツルが、5年ぶりに家に戻ってきたら、そこには「お父はんの生まれ変わり」の猫と、それに多大な愛情を注ぎ込む母はんの姿があった。

稼業のお好み焼きを継ぐ形になったミツルは、友人の秋山と共に猫を追い出すべく試みるが、猫の方がはるかに強い。結局5年間毎日お好み焼きを焼き続けても、猫もお母はんも一向に衰える気配はなく、「短い人生楽しくやろう！」と元気一杯。その二人を横目で見ながら「ああ人生は暗く長い…」とつぶやくミツル。

感想：

ここまで来ると『じゃりん子チエ』の世界まではほんの少しだ。冒頭のコマのお好み焼き屋はそのままホルモン焼き屋「チエちゃん」に移行できる。主人公のミツルは作者のはるき悦巳自身の姿だろうか。友人の秋山はヒゲを剃ったテツだ。何より、この猫のたくましさ！

ストーリーを味わうというよりも、全体のリズム感、画から伝わってくる人々の生活のパワーを「体験する」ことのできる漫画で、躍動する作品のエネルギーは、すでにつげ義春の影響を完全に脱し、「はるき悦巳の世界」を完全に作り上げている。

舞台は整った。あと必要なのは、この舞台で暴れまわることのできる、個性的で強力な役者（キャラクター）たちだけだ。

舞台の袖では、もうチエやテツが出番を待ちかねている。

テツはシアワセな男か？

『チエ』の登場人物の中で、テツほど幸せな人間はいないと思う人も多いだろう。献身的な美しい妻と、しっかりものの娘がいて、定職にも就かず、ただ毎日遊び暮らしているだけで、生活は妻と娘に支えてもらっている。ガキ大将がそのまま大人になったような男で、腕っぷしの強さで周りに子分を従え、自由奔放にさまざまな騒動を巻き起こす。一見、こんなにいい御身分の男はいない、と思われる。

しかし、作品を読んでいると、テツ自身は、たえず欲求不満を抱えており、奇妙な被害者意識を持ちながら生きていることが明らかになる。ふだんは漫然とぶつぶつ文句を言っているだけだが、ときおりそれは明確な表現を取る。

「くそー！くやしいなあ… チエや花井がおまえのその顔を見たら、ワシが被害者やゆうことがはっきり分かるのに…」（単行本第17巻「捨丸のオミヤゲ」）

このセリフは、部屋でヨシ江と二人だけになったときに、ヨシ江に向けて発せられたものだ。テツはここで自分が「被害者」だと言いきっている。一体何の被害者なのだろうか。

それを解く鍵になるのが、次のセリフだ。

「ワシなんか、ほんまは強烈にカンがええんやど…そやけど、あんまりカンはたらかすと不幸になるからしらんふりしてるんや」（単行本第14巻「行きはよいよい帰りはこわい」）

これも、ヨシ江と二人きりのときにヨシ江に向かってテツが漏らした言葉である。「敏感になりすぎると不幸になる」というテツの発言が意味するのは、普通に考えれば、以下のようなことだろう。

つまり、テツは、常日頃から、自分が働いておらず、妻と子供に養ってもらっていることに心中深く負い目を感じながら生きているのだが、そのことをなるべく自覚しないように気持ちを押し殺している。それを自覚してしまうと、良心の呵責を感じて「不幸になる」からだ。

それならば、働けばいいではないか、と誰もが思うだろう。しかし、テツは「就職するような奴はカスや」（第14巻「胸騒ぎの命日」）という妙なポリシー（？）を持っている。

これを、単なる働きたくないための言い訳とみなすのは容易い。また事実そうなのだが、テツが一種独特の「男の美学」にこだわって生きていることもまた否定できないのである。

テツの美学

テツによる「男の美学」とは何かを、彼の発言から探ってみよう。

「ワシがあれだけ男らしい生き方せえちゅうたん忘れたんか！ ゆすりは女のくさったんがやることじゃ」（第二巻「勘九郎とコケザル」）

「嫁はんに逃げられるのびびって男がつとまるかい」（第四巻「ミツルの仲人は誰？」）

とにかく、テツは強烈に「男」にこだわっている。そのテツにとって、最大のウィーク・ポイントは「女」である。男であることにこだわるテツは、男が女に支配される構図が我慢できないのだが、自らを省み、周囲を見渡すと、自分自身はヨシ江とチエとオバアはんに、オジイはんはオバアはんに、花井渉は朝子に、マサルはチエに、完全に優位に立たれてしまっている。この事実、なかならず自分がヨシ江に支配されているという厳然たる事実が、なによりもテツを欲求不満に陥らせるのだ。そしてこれは、単にテツが就職するだけで解決できるような性質のものではないのである。

テツは、『ジャリン子チエ』の世界という完全な女系社会に、ただ一人、永遠の負け戦を敢然と挑み続ける雄雄しい反逆者なのだ。

テツと三人の女たち

ここで、テツにとって切っても切れない関係にある三人の女性たちとの関係、より正確に言えば、三人の女性によるテツへの支配形態（！）を簡単にみてみよう。

まず、テツとオバアはん。言うまでもなく、オバアはんによるテツへの支配形態は「暴力」である（もちろんそれだけではないが）。しかし、奇妙なことに、テツにとってはむしろこれは比較的ダメージの少ないやり方である。

テツとヨシ江。ヨシ江は、「人格」によってテツを支配している。これはテツにとってもっともダメージの大きいやり方である。なぜなら、それはテツにとって克服不可能な障壁だからだ。敏感な読者はお気づきのことと思うが、ヨシ江がテツを支配する手段はそれだけではない。が、「大人の話」になるのでここでは触れないでおく。

最後に、テツとチエ。チエは、敢えて言えば、「愛情」によってテツを支配している。チエとテツを見ていると、ときとしてどちらが親でどちらが子供か分からなくなるくらい、常識的な親子の立場が逆転してしまっている。チエは「テツ、ひとりでは生きていけんのや」と言ってテツ

の面倒を見、テツはチエに小遣いをせびり、店の金を持ち逃げしようとする。チエはもちろんテツを叱りつけるが、その様子は、言うことを聞かないやんちゃ坊主に対する母親のような面影すら感じさせる。

チエは、ある意味ではテツのことをヨシ江よりもよく知っている。テツは、オバアにもヨシ江にも言えないことをチエにだけは打ち明ける。一方テツは、自分の娘でありながら、チエを憧れのアイドルを見るようなまなざしで見ている。テツが入院しているとき、付き添いにきてくれたチエに向かって、「ワシ、チエはウンコもションベンもせんと思てるんやから」と照れながら言っているのだ。もちろん本気ではないが、テツの正直な気持ちがよく現われた言葉だ。また、テツはチエをヨシ江似だと思っている。夢の中で出てきたチエを、「嫁はん（ヨシ江）に似てかわいい」と言っているからだ（第6巻「ミルクのチエちゃんへ」）。これは、夢の中でつい漏らしてしまった、テツの本音だろう。

テツが恐れているのは、将来チエがヨシ江のようになるのではないかということだ。二人きりになるとテツをリードしてしまうヨシ江のように、チエもまたテツをいいように扱うようになるのではないかというのが不安なのである。テツがその不安をもろにチエにぶつける場面が、単行本14巻「ジャンケンはおおイヤだ」にある。

テツ「…おまえ、だんだんヨシ江に似てくるな」

チエ「え…?!」

テツ「ゆうとくけど、おまえみたいなタイプ、男に嫌われるよ」

チエ「なんでや…氷おごって嫌われたら、ええことないやん」

テツ「おごり方や。おまえ、なんでそおワシをリードしたがるの」

チエ「リードてなんや」

テツ「そやからおまえは暑いなとゆうだけでええの」

チエ「暑いな…?」

テツ「そお。ほんならそこでワシが氷でも食うかとゆうんや」

チエ「……」

テツ「だいたいそおゆうのが普通なんよ」

チエ「お金は誰が出すんや」

テツ（椅子からずり落ちそうになって）「あっ、あっ」

こんな調子では、テツは残念ながらこれからもずっとチエにリードされ続けることだろう。

テツはこれからどうなるのか？

さて、『じゃりん子チエ』の作品世界の枠組を離れて、読者が気になることの一つに、「この家族は将来どうなるのだろうか？」という疑問がある。「作品世界の枠組を離れて」と言ったのは

、言うまでもなく作品の中では時間の流れが止まっているため、チエは永遠に小学五年生のまま、テツはいつまでも四十前の男盛りのままなので、「将来」の心配の必要がないからである。

しかし、チエがこれから小学校を卒業し、中学、もしかしたら高校と成長していくにつれ、テツの立場はどうなるのだろうか。

それを想定して書いてみたのが私のHPにアップしてある『ジャリン子チエ第二部・チエの青春』である。そこでは、原作終了から7年後、つまりチエが18歳になったときの状況設定で物語を作っている。あくまでも私個人の主観に基づく妄想だが、関心のある方は読んでいただければと思う。

考察：小鉄

小鉄：最大の人格者

『じゃりん子チエ』というマンガは、常軌を逸したメチャメチャな人間もたくさん出てくる一方で、常人よりもはるかに人格的に成熟した人物も登場する。こうした「真の人格者」とでも呼ぶべき人たちは、テツやヤクザたちをはじめとする破綻者たち（アウトローたち）とのバランスを取り、このマンガ全体を一定の常識の枠内の中に保つ役割を果たしている。たとえば、花井拳骨やヨシ江といった人々がそういう登場人物である。

しかし、『チエ』の登場人物の中で、もっとも客観的な視点を持ち、もっとも成熟した人格を備えているのは、実は人間ではなく、猫の小鉄である。

小鉄は、物語の当初は、腕っ節は強いがちょっと間抜けなとぼけたキャラクターとして動いていたが、『小鉄対アントンJr』の話を境にして、人格的な深みのある、老賢者のような、しかし同時にユーモアと愛嬌にあふれた魅力的なキャラクターに移行していく。

小鉄は、猫の世界では「月の輪の雷蔵」として、そのスジの猫では知らぬものいなしほど有名な大物でありながら、現在は半分隠居のような状態でチエの家の飼い猫におさまっている。それは小鉄がもう流れ者の不安定な生活に疲れたこともあっただろうが、何よりも、小鉄がチエのファンになってしまったからである。

小鉄のチエに対する感情は、まさに「ファン」という言葉がふさわしい。げんに小鉄はあるとき「ワシ、ヒイキにしてるスターの悪口をゆわれると狂っちゃうよ」（番外編「ジュニアの初恋」）とジュニアに向かって言っている。

以後、小鉄はもっともチエの身近にあってチエとそれを取り巻く日常生活および騒動の目撃者であり続ける。と同時に、しばしば重要な場面で決定的な働きをする。もっとも、その働きが人間（チエ）から正当に評価されることはほとんどないのだが。

『チエ』においては、人間と猫の関係はきわめて親密であるように見えるが、猫の言葉を解する人間は一人も出てこない。人間の世界と猫の世界のつなぎ目の役割を果たしているのはチエとお好み焼き屋のオヤジ（百合根）だが、この二人でさえ、小鉄やジュニアの言葉をきわめて不完全にしか理解しない。そして、そこから生じる食い違いやディスコミュニケーションがまたこのマンガの面白さの一つにもなっている。

それはそれとして、小鉄である。小鉄は、幾多の修羅場をくぐってきた渡世猫でもあり、冗談好きな愛嬌モンでもあり、ジュニアという若き後継者（？）を指導する教育者でもある。その言葉

には豊かな人生体験に裏打ちされた深い含蓄があり、その行動はいちいち的確である（その意味がチエには分かってもらえず空振りすることもあるが）。これほどユニークで魅力的な猫は古今東西のマンガを通じても滅多に見られるものではない。

小鉄とジュニア

ジュニアから見て、小鉄は父親アントニオを打ちのめし、キンタマまで奪った『親の敵』である。しかし、仇討ちにやって来たジュニアは、逆に小鉄の人格に魅入られてしまい、以後、小鉄の側を離れなくなる。

この二匹の掛け合いは非常に面白く、とうてい脇役にはおさまりきれない味わいがある。そこで、彼らを主役にした物語がいくつも作られ、『じゃりん子チエ番外編』として一冊にまとめられた。

ジュニアはまだ血気盛んな若者で、小鉄から昔の武勇伝を聞いたがったり、退屈しのぎにヤクザ猫たちと付き合って小鉄に叱られたりする。小鉄に色恋の話をねだったりすることもある。ジュニア自身はその道に関してははなはだウブで、初恋に敗れたことがいまだに心の傷になっている。また、父親のアントニオに対して過剰なほどの憧れとコンプレックスを持っている。

小鉄はそんなジュニアの若さをうまくコントロールし、戒め、教え導く慈父のような役割を果たしているのだが、その手腕がもっとも要求されるのが、ジュニアが決まってノイローゼに陥る春の季節だ。

ジュニアのノイローゼは、ありあまるエネルギーが内向することで生じる青春特有の病である。小鉄はそのたびに、ジュニアのエネルギーを外に向けて放出させたり、丹念なカウンセリングを行うことで解決を図ろうとする。

小鉄自身、若い頃は「男というものに過剰な思い入れをしていた」時期があった。彼自身多くは語らないが、手痛い失敗をしたこともあっただろう。小鉄といえども、最初からあれほどの人格者であったわけではない。長年の人生体験によって精神的に鍛えられていったのである。だからこそ、彼の言葉には重みと含蓄がある。

月の輪の雷蔵伝説

若い頃、小鉄の名声を一躍全国的に広めることになったのは、数十匹のヤクザ猫相手にダイナマイト抗争を演じた九州「猫町銀座」での伝説的な活躍である。ここで小鉄は、対立する大阪ヤクザの集団と九州地元ヤクザの集団にたった一匹で立ち向かい、もろとも叩き潰すという離れ業

を行っている。

このときの逸話の一部始終は『どらん猫小鉄』という一冊の本にまとめられている。
この物語はとにかく強烈に面白い。未読の方は、どんなことをしてでも読むべきだと思う。
これを読めば、小鉄がいかに凄い猫かということが分かる。

「月の輪の雷蔵」の名前はこのときに生まれた。小鉄のシンボルマークである眉間の三日月の傷（月の輪）もこのときにできた。おそらく一生残りつづけるであろうこの傷は、おそらく小鉄の生涯最大の敵カズヒサのブーメランナイフによってつけられたものだ。

ならず者たちを一掃して「猫町銀座」復興の父となった小鉄は、全国にその名を轟かせることになる。同時に小鉄は、この「月の輪の雷蔵」という伝説と残りの人生を通じて格闘することにもなってしまう。とにかく、「月の輪の雷蔵」を倒して名を上げたいという猫がひっきりなしに小鉄のもとを訪れるようになるのだ。

チエの家に転がり込んだとき、小鉄はそうした過去のしがらみから自由になることを求めていたのだろう。しかし、そうはいかなかった…。おそらく小鉄は死ぬまでこの伝説と闘うことになるのだろう。もしかしたらカズヒサはじめ九州ヤクザ猫たちの怨霊（？）の因縁かもしれない。

小鉄の名セリフ

『ジャリン子チエ』の数ある名セリフの中でも、小鉄は特に心に残るセリフを吐く。
その最初のもは、アントニオの仇討ちに来たジュニアと墓場で対決した後につぶやく

「人間と付き合おうと苦労するよ」
(第2巻「アントン Jr. VS 小鉄」)

だろう。このセリフで、小鉄は作品世界での卓越した地位を不動のものにした。

他にも、チエとヒラメがひょうたん池に写生に行っ、ヒラメが一日かけて仕上げた絵を見て小鉄が叫ぶ、

「傑作や！」
(第6巻「ヒラメちゃんの隠れた才能」)

とか、
自分の顔はテツの遺伝ではないかと悩むチエに対して小鉄がそっとつぶやく一言、

「ワシのことは分らんけど、チエちゃんがどっちに似たのかは分かる。

チエちゃんの横顔はお母はんにそっくりや」
(第7巻「父兄運動会その2」)

なども、印象的なセリフだ。小鉄がチエやヒラメを見守る暖かい気持ちが伝わってくる。

チエやヒラメの言動を実の親よりもよく知っている小鉄は、作品世界のタブーに迫るような痛烈な言葉を吐くこともある。

あるとき、チエとヒラメが宿題をズルしてヒラメの兄さんにやってもらった答えを書き写しているのを見た小鉄は、

「よおわかったわ…あんなことばかりしてるから二人ともいつまでたっても五年生なんや」
(第11巻「ギリが二つのイヤな奴」)

と言って出ていってしまうのだ。

小鉄はまた芸術のよき理解者でもある。

ひょうたん池でヒラメの絵を「傑作や！」と断言したことは前に述べたし、大阪のコンクールで金賞を取ることになる「アップーカット」という絵を見た時にも、絵の鑑賞の仕方をジュニアに講釈している。

また、チエとオバアはんがヒラメから来た年賀状を見てこのハガキは将来値が出るという話をしているのを聞いた小鉄は、

「芸術から一番遠い話してるなあ・・・」
(第13巻「値上げはほどほどに」)

と呆れている。

小鉄の精神は、物事を金や損得でしか考えられない人間のあさましい根性をはるかに超えた高みに達しているのだ。

もっとも、小鉄といえども食い気には勝てないときがあるようだ。晩ご飯がもらえなくてマサルに奴当たりしたこともある。(第2巻「文部省選定映画の見方」)

山の中のあいつ

小鉄はテツのことが嫌いである。これは作品中での両者の絡みを見れば一目瞭然だ。チエにいつも迷惑をかけているテツを嫌うのは、チエのファンとしての小鉄の立場上、分かるような気もするが、それにしても、敵に対しても寛容で度量の大きい「人格者」小鉄にしては、テツに対するあの激しいまでの嫌悪感は少し大人気ないという感じがしないでもない。

ひとつ、このことの原因を探ってみよう。

「考察：テツ」の中で私は、テツが「男」であることに強いこだわりと思い入れを持っていると述べた。また先ほど、小鉄も若い頃は「男」というものに過剰な幻想を持っていたときがあったと書いた。（ちなみに、「必殺タマつぶし」という技は、いかにも小鉄の「男」へのこだわりを象徴している。）

しかし小鉄は、すでに「男」という幻想から解放されている。その意味で、彼はテツよりも一段高い境地に達しているわけだ。

小鉄は、「男」にこだわって頑なに突っ張り、女性陣にアホな反抗を試みるテツを見るとき、なんとなくかつての自分を見るような近親憎悪に襲われるのではないだろうか。それが、テツに対するあれほどの攻撃性につながるのだ。

同じことはジュニアに対しても言えるが、年下であるジュニアに対しては、小鉄は先に述べたように慈父の態度で接している。

小鉄はある日、彼が「男」へのこだわりから解放されるきっかけになった出来事をジュニアに語って聞かせている。過去を語りたがらない小鉄にしては珍しいことだ。

この物語は、『じゃりん子チエ番外編』「山の中のあいつ」の巻に収められている。

小鉄が「月の輪の雷蔵」として流浪生活を送っていたあるとき、山の中で奇妙な男（猫）に出会った。何か鋭い目をした猫で、小鉄のことには気づくそぶりも見せない。その男のそばで過ごした次の日、ならず者風の猫たちが3匹やって来た。一見親しげだが、明らかに小鉄かその男のどちらかを狙っている。小鉄には、「あいつ」が敵か味方が分からない。

平静を装いながらも張り詰めた雰囲気の中で数日が過ぎる。

新月の夜、焚き火を囲んでいた五匹の猫は、火が消えた瞬間が勝負だと悟っていた。

突風で焚き火が消える。闇の中で小鉄は2匹を倒し、そのまま逃走する。

次の日、道の向こうから歩いてきた「あいつ」を見た小鉄は、すれ違いざまに「俺は二匹倒した」という意味を込めて二本の指を突き出して見せる。すると、「あいつ」も二本の指を立てて歩いて行った。男の顔は、もう何もかもふっきたように爽やかな表情だった…

そういう話だ。

この話を聞かされたジュニアは、五匹のうち、小鉄が倒したのが二匹とすれば、残りは「あいつ」と小鉄を除けば一匹。「あいつ」が二匹倒したとするなら一匹足りず、計算が合わないと言って騒ぐ。

しかし、小鉄には分かっていた。足りない一匹は「あいつ」自身だったのだ。

ジュニアにこの話の意味が分かるときはくるのだろうか？ たぶんテツには死ぬまで分からないだろうが…

はるき悦巳は、マンガ家を志すにあたって影響を受けた数少ない先達としてつげ義春の名前を挙げています。はるきだけではなく、つげから影響を受けたマンガ家は多い。だが、それは主に精神的、間接的な影響であって、実際の作品にその影響が直接に出ているケースは比較的少ないように思われる。

はるき悦巳についてもまた同じことが言える。彼の最初期の作品（『政・トラぶっとな音頭』や『舌町物語』など）における建物や風景の描写などを除いて、絵についてもストーリーについてもつげの直接の影響を感じ取ることは難しい。しかし、たとえば初期の『じゃリン子チエ』を劇画として見た場合、つげの影響は見て取れるような気がする。

ここでは、そのあたりについて少し考察してみたい。



つげ義春については、すでに本格的な評論がいくつも書かれており、彼の作品を巡る解釈や分析には事欠かない。実際、彼の作品は読者に強い分析欲を起こさせる素材でもある。それだけ文学色が濃いという言い方もできるだろう。

はるきはつげの作品を読んで、「マンガでこんなことも書いてええんかと思った」と述べている。これははるきのみならず、従来のマンガの概念を打ち壊したつげの作品に触れた読者の多くが抱いた感想であろう。

ここはつげ義春について論じる場所ではないので、手短にまとめるが、初期の貸本屋時代を除けば、つげの作品ははっきりといくつかのタイプに分けられる。

まず、「ねじ式」や「ヨシポーの犯罪」、「必殺するめ固め」などに代表される、夢や意識下の世界を描いたような不条理でシュールな作品。一般につげ義春独自の世界として広く認知されているのがこのタイプの作品だろう。

次に、「ほんやら洞のべんさん」、「長八の宿」など、いわゆる「旅もの」と呼ばれる作品。これにはほのぼのとした中にも表現としての深みを感じさせる佳作が多く、一つのジャンルとして確立された世界を持っている。

そして、最初の二つのタイプを融合させたような、凄みのある作品群。これには、「ゲンセンカン主人」や「やなぎや主人」などがあり、より幻想的な情緒感をたたえた「沼」「紅い花」「も

っりき屋の少女」なども広く言えばこれに含んでよいだろう。

最後に、「日の戯れ」「退屈な部屋」など、日常を描いたもの、さらに「やもり」「海へ」など自伝的なものを含めた、私小説的な作品がある。「無能の人」もこれに含んでよいだろう。その各々が、かなり違うタッチで描かれているため、つげ義春について何の知識もない人が読んだとしたら、同一人物の作品とはにわかに信じがたいほどである。



さて、これらのつげの作品の中から、あえてはるき悦巳、それも特に『じゃリン子チエ』との接点を探ろうとするなら、まず検討の対象となるべき作品は、『紅い花』と『もっさり屋の少女』ではなかろうか。

これはどちらも、一人で客相手の飲食店を経営する少女が主役で、しかも少女の用いる方言が独特の味わいを与えている点に、形式的には『チエ』との共通点を見出すことが可能である。

『紅い花』のキクチサヨコは、父親が働こうとしないために、山の中で旅人相手の茶菓子店をやっている、学校も休みがちだ。シンデンの 마사ジはキクチサヨコをいじめないけすかない同級生だが、サヨコに宿題を持ってきてくれる。マサジはサヨコの父親のこともよく知っていて、内心ではサヨコの境遇に同情している。

『もっさり屋の少女』のコバヤシチヨジは、幼い頃に自分を売った両親のすぐそばで暮らしながら、町外れの居酒屋で客商売をしている。自分の境遇を諦観しながらも、徒に運命を嘆くことなく、街の女の子が履くような赤い靴が欲しいなどとたわいもないことを真剣に考えている。赤い靴を買ってやるとさぶく客に身体を弄ばれながらも、たいして抵抗もせず、罪悪感もなく、淡々とその日その日を生きるチヨジ。

つげ作品全体を読むさいの鍵でもある、これらの少女たちに漂う深い官能性は、はるきの描く作品世界には決して見られないものだ。

物語における官能性の不在という点では、はるき作品は、彼が影響を受けたことを認めているもう一人の作家ちばてつやの作品に通じるものがある。

つげとはるきの作品世界に共通するのは、そのリリズムだろう。

『紅い花』の最後のコマ、キクチサヨコを背負って山道を下りながら「眠れや…」と語りかけるマサジと、それに「うん」と答えるサヨコ。

漫画家なら誰もが書きたいと思うに違いない、叙情性に溢れた古典的なラストシーンだ。

これと同じ情感をたたえているシーンが、はるき悦巳の作品にもあった。

彼の代表作の一つ、『ガチャバイ』のラストだ。



『もっきり屋の少女』との関係では、はるき悦巳氏による次の発言を取り上げたい。

「...ただ、チエはそういう状況にあってもコンプレックスを持たずに、克服するような強さは持っていますね。コンプレックスを持たないというより知らんのかな。...日本一不幸ということばをつかったりしているけど、結局、自分のおかれてる状況が不幸だということも知らん子どもたちだと思います。」

(灰谷健次郎との対談「オオカミがじゃがいも食べて」より)

この発言を読んだとき、私は正直言って軽いショックを受けた。

「自分が不幸な境遇にあることの自覚がない」という点で、チエとコバヤシチヨジは同じ立場にいる。

言われてみれば確かにそのとおりなのだが、はるき氏がそうした認識をはっきりと持ちながら「チエ」を描いていたということが驚きだったのだ。

ふだんは作品の持つユーモアとペーソスの下に隠されてしまっているが、初期の「チエ」に漂うある種の「暗さ」は否定できない事実だ。

この「暗さ」をめぐっては、読者の間でもさまざまな憶測が巡らされていて、評論家の呉智英氏などは、それはチエの家族が社会的被差別者だからだとまで断言している。

私は、呉氏のは明らかに無茶な解釈だと思うが、『チエ』という作品がそういう見方すら可能にする要素をある時期まで孕んでいたことは認める。

『もっきり屋の少女』を読んで、明るい作品だと思う人はおそらくいないだろう。しかし暗い作品かと言われるとそうも言い切れない。それは最後の主人公（作者の代弁者）のセリフ「がんばれチヨジ がんばれチヨジ」をどう解釈するかにかかってくる。

『チエ』は言うまでもなく、決して暗い作品ではない。しかし、どこかに「暗さ」は漂っている。とりわけ、作品の連載当初に、なんとなく漂っているその「暗さ」の部分は『もっきり屋の

少女』と共有しているものではないか、と思う。

それについて作者のはるき氏自身が明確に指摘したのが、先の言葉だ。

コバヤシチヨジは、自分の境遇を「みじめです」と言いながらも、それが何を意味するかに気づいていない。（それが主人公の青年にはやりきれなく腹立たしい。）チエもまた、自分のことを「日本一不幸な少女」と言いながらも、その不幸がほんとうは何なのかにおそらくは気づいていない。そして、最大の不幸はまさにこのことなのだ。

『チエ』の「暗さ」は巻を追うごとにどんどん薄まっていき、やがて完全に払拭されてしまう。その時点で、『チエ』とつげ義春の接点は消えたといってよいと思う。

それは、『チエ』が「劇画」から「マンガ」になったことを意味してもいた。

最近書店でよく見かけるこの本。映画評論家の木全公彦氏と精神科医の林公一氏が『あしたのジョー』や『エースをねらえ！』などの名作マンガの主人公がその後どんな人生を歩むのかを精神医学や心理学の立場から分析している。先に『ドラえもん』について同じ企画を立てて成功したので（『大人になったのび太少年』）、その第二弾（二匹目のドジョウ）ということらしい。

その中に『じゃりん子チエ』について一章が割かれている。本屋で一読したが、読むに耐えない内容だったので、すぐに忘れることにした。『チエ』の愛読者なら皆多かれ少なかれ同じ反応をすることと思う。

まあ、こういう企画本は基本的にシャレの世界で、好き勝手な想像は許されて当然なので、いちやモンをつけるのは無粋なこととは知りつつも、この本はわりと色々なところで宣伝されており、最近『チエ』を取り上げた数少ない出版物でもあるので、一言だけコメントしておきたい。

この本の考察は、少なくとも『チエ』に関する限り、根本的な誤謬を含んでいる。

今この本が手元にないので、引用できないのが残念だが、著者が精神医学の立場から論じているのはおおむね以下のようなことだ。

チエは子供の頃から自立した大人として振舞うことを余儀なくされ、子供らしい心や他者への依存心を抑圧してきたために、成長してから不眠、下痢などの身体症状が出るだろう。

そして、チエは大人になってからも、問題を何でも自分で背負ってしまい、周囲の人に頼ることのできない性格のために、ストレスを溜め込み、鬱状態に陥ることになるかもしれない。

また、この暗い将来像とは対照的に、明るい展望として、チエが商売人の道を歩んでアメリカに渡り、実業家として大成功するという未来のシナリオも描かれている。

非常に大雑把な要約だが、『チエ』をマジメに（！）読んできた人なら、上記のシナリオが明らかに不自然だと即座に感じるだろう。

まず、チエはなにひとつ「抑圧」などしていない。自分を「日本一不幸な少女や」と呼び、周囲の大人から頼りにされ、「自立した大人として振舞う」ことを強いられているのは事実ではあるが、同時にチエは子供としての生活も精一杯生きている。

そこにあるのは子供の心を抑圧し、背伸びして大人ぶる少女の姿ではなく、子供の素直でのびのびした心を持ちつつ、大人顔負けのパワーと知恵をも兼ね備えた「スーパー少女」の存在なのだ。

これが決して買いかぶりでもファンゆえのえこひいきでもないことは、原作を読んだことのあるまともな神経の持ち主なら理解できると思う。長尾剛著『じゃりん子チエという生き方』（双葉社）のチエについて論じた章を読めばそのことはもっと明快に述べられているが、長くなるのでここでは触れない。

とにかく次のことははっきりしている。チエは、大人と子供で対応をごく自然に使い分けることのできる賢明な少女だ。そのことがストレスになるほどヤワな子ではない。

だから、子供時代のストレスが大人になって噴き出すなどというのは、論外である。

次に、大人になったチエが、仕事や責任を何でも自分で背負い込み、他人に頼ることができないために、ストレスから鬱状態になってしまうという主張も、同様の理由から論駁され得る。

チエは、決して問題を一人で背負い込むようなことはしない。彼女はときに狡猾と言えるほど上手に「責任転嫁」する術を心得ている。「ウチ知らん」の一言でしばしばその犠牲に会っているのは他ならぬテツだったりする。

大人になったら、チエはますます周囲の人間を上手に「使う」ようになりこそすれ、間違っても彼女がいろんな責任を一人で背負い込んで孤立するなどということはなかろう。それは基本的な「人間の器」の問題だ。

とはいえ、子供としてのチエが、自覚はしていないにせよ、周囲の大人たち（オバアはん、ヨシ江、花井、そして分かりにくいガテツ）から有形無形の「保護」を受けており、大人になればそうした「保護」がなくなっていくであろうことは確実だ。そのとき、チエは自分だけの力で人生のさまざまな問題に対処していかななくてはならない。

しかし、そんなときにも、チエが鬱状態になって精神科医のカウンセリングを受けるなどという事態が想像できますか？

それは「太陽が輝かなくなって月から光をもらう」のを想像するようなものではないだろうか？あるいは「どんより曇った日本晴れを想像せよ」と言うのと同じではないか？

「鬱なチエ」という言葉がそれ自身の中に矛盾を含んでいることに気づかない人には、「あんた一体『チエ』の何を読んできたんや」と問いたい。

最後に、アメリカで実業家としてサクセスするチエのシナリオも、いまひとつ腑に落ちなかった。細かい部分はもう覚えていないが、大阪でのホルモン屋の事業が失敗、一か八か渡米して始めた商売で、ホルモン屋のチェーン店が招き猫のアイデアをきっかけにブレイクするといった内容だったと思う。

ストーリーのディテールにもいちいち引っかかるものがあったのだが、根本的に違和感を覚えたのは、全体がステロタイプ化された「アメリカン・ドリーム」物語の視点で書かれているという点だ。つまり、これなら主人公がチエである必然性が感じられないと思った。

しかし、この点は純粋に主観の問題であって（実際にはこれまでの点もすべてそうなのだが）、くどくど述べても「あなた方の理解は浅い」という以上のことを言うことにはならないような気がするので、不毛な感想文はここらへんで打ちきりたいと思う。

以上、だらだらと書いてきたが、結局言いたいのは、

「木全公彦さん、林公一さん、『チエ』について書いてくれてどうもありがとう」

ということでした。

テツのモデル？

『チエ』や『日の出食堂の青春』、それに『どらん猫小鉄』を読めば、はるき悦巳氏がヤクザ映画の相当なファンだということは明らかだ。私は、テツは三船敏郎のとんでもない変種だとずっと思っていた。あんなメチャメチャな〈喧嘩屋〉はマンガか任侠映画の中にしか存在しえないと。

しかし、先日、宮崎学氏の怪著『突破者』を読んでいると、何か奇妙にテツと符合する人物のことが書かれていた。

以下、少し長くなるが、興味深い部分のみ引用する。

「万年東一は、ある意味では戦後五十年史を彩る歴史的人物である。万年に触れずして東京のアウトロー史、ことに敗戦直後の混沌を極めた東京の裏社会史は語れない。とにかく凄い男であった。この五十年間に、私は善玉悪玉を問わずいぶん多くの強烈な人間と出会ったが、そのなかでも万年は極めて特異なキャラクターだった。」

「敗戦後の盛り場は多くの愚連隊を生んだ。戦場の息吹をそのまま本国の中に持ちこんだ特攻隊くずれなどの若者が無秩序状態にあった盛り場を拠点にして暴れまわった。その愚連隊から『愚連隊の神様』として崇められていたのが万年であった。…」

「その万年が愚連隊の道に足を踏み入れることになったのは、病気としか思えない喧嘩好きのせいであった。1911年（大正元年）に生まれた万年は幼くして不良の群れに身を投じ、連日喧嘩を繰り返して頭角をあらわした。万年を若い頃から知っている人物の話では、度胸満点で喧嘩はめっぽう強く、東京の名ただる不良をすべて叩きのめしたという。かくて、昭和初期には不良の頂点に君臨していた。その勇名は東京中に轟き、不良少年の憧憬の的だったそうだ。」

「10代、20代の万年の喧嘩ぶりは凄まじいの一語につきる。東横線だか京王線だかの沿線に住んでいた万年は線路伝いに歩いて新宿に出るのを日課としていた。歩きながら喧嘩相手を物色するためである。途中で不良と出会い、目と目が合った途端に喧嘩になる。万年から直接聞いた話では、自宅から新宿に至るまでに10人くらいとやり合うのは再々だったそうだ。若い頃の喧嘩の話をするときの万年は不良少年のようないい顔をしていた。」

「こうして20代の半ばで不良の世界で頭角をあらわし、新宿を縄張りにして暴れ放題に暴れた。『新宿のヤクザの親分で万年に脅されたことがない者は皆無』といまだにいわれているほどに徹底した暴れ方だった。…」

「万年の面白いところは、平松総長の強い勧めにもかかわらず、ついにヤクザにはならなかったことである。万年はヤクザを嫌っていた。『ヤクザは汚い。喧嘩はその場で勝ち負けを決すればいいんだ。それを後まで尾を引かせて拳銃や日本刀を持ち出すのは汚い所業であり、弱い人間である証拠だ』と私によくいていた。その万年のしのぎの一つがヤクザの用心棒であったわけで、皮肉といえば皮肉な話である。…」

「といっても、万年の人柄は、普通世間が考えるような『愚連隊』のイメージでくくれるようなものでは決してなかった。ものの筋目やけじめを重んじる折り目正しい人間であった。私にいわせれば、不良少年の心性を死ぬまで持ちつづけた、アウトローの純血種である。弱者をいじめたりするのは絶無で、たえず強者に逆らい、だれをも恐れなかった。山口組三代目の田岡一雄組長なども呼び捨てにしていた。」

「また、都会的なスマートさと潔癖さをあわせもった、東京ならではのアウトローでもあった。なによりもダンディだった。…映画俳優のようなわざとらしい窮屈な着付けではなく、身についたラフな着こなしをしていた。拳措動作も粋でスマートだった。近くで接してみて、かつて不良少年たちが万年に憧れた心持がよくわかる思いがした。」

「『週刊現代』時代に、右翼の大東塾の者に紹介されて会ったのが、私と万年との付き合いのそもそもの始まりだった。このとき、万年は60歳代の後半であったと思う。だが、こちらが圧倒されるほどの偉丈夫で、若く精気が漲っていた。当時の私は身長178センチ、体重85キロほどであったが、近くに寄ると私より一回り大きかった。胸幅が厚く、背広を通して見える腕は丸太棒ほどある。それでいて、腹部のでっぱりなどは一切なく、全体としては実にスマートな印象を受けた。」

「万年は不思議な男で、金が飛び交う裏社会に身を置きながら、金銭への執着心がまったくといっていいほどなかった。それも万年のダンディズムだったのだろうが、金を貯めるなどという発想がそもそもない。財布の中に、いつも一万円札が二三枚入っているだけだった。ヤクザなどから手に入れた大金はそのまま若い衆や知人にぼんとやるのである。万年と接して、世の中には金に淡白な人間がいるということを私は初めて知った。」

「金がないから、自分の事務所も持っていない。新宿の三越裏の白十字という喫茶店を事務所代わりにしていた。毎日深夜まで白十字の隅の席に陣取って、次から次へと訪ねてくる裏社会の依頼者と面談していた。面白いことに、私がいつ訪ねても、チョコレートパフェやあんみつを美味そうに食べていた。『愚連隊の神様』とチョコレートパフェの組み合わせは、いつ見てもやはり可笑しかった。」

(宮崎学著『突破者——戦後史の闇を書け抜けた五十年』p.117 - 121より、太字は引用者による)

これで娘でもいればなお面白いのだが、そういう事実があったかどうかは不明である。

もちろんマンガの中のテツと『愚連隊の神様』万年東一を単純に比較するわけにはいかないし、はるき氏が万年東一のことを知っていたはずもなからう。

アウトローを必要以上に美化したり持ち上げたりする気は毛頭ないが、戦後社会のどさくさにはこういう「アウトローの純血種」が棲息する余地はあったようである。

アウトローもインテリもヤクザもオバハンも「じゃリン子」たちも含めて雑多な人間たちが共存し合う社会。『チエ』によって一種の理想郷にまで高められたこのような共同体の姿は、その影さえ次第に日本から消滅しつつある。

ましてや、ヤクザでもなければ一般市民の枠にも属さないテツのような究極の「アウトローの純血種」は、現実社会ではもちろん、フィクションの世界ですら居場所を失いつつあるのかもしれない。

だからこそ、せめてテツには死ぬまで「ケンカ好きの不良少年」のままでいてほしいのだ。万年東一もすでにこの世にはいない。

「万年は真の不良であったと思う。老いても、不良少年の純な心性を残していた。…なによりもギャングスターとしての華があった。…その後もときどき白十字や自宅を訪ねて会っていたが、10年ほど前に万年は死んだ。70歳を越してはじめて所沢に設けた持ち家は、こちらが恥かしくなるほどのボロ家だった。一生を不良少年の流儀と心性で貫いた、男の苛烈で華麗な生涯だったと思う。」（前掲書p.130）

なお、万年の妻がつい先日亡くなった。以下の文章は宮崎学氏のHPからの転載である。

平成13年4月14日、故・万年東一さんの奥さんの睦美さんが 逝去された。

享年八十六歳であった。

今日そのお通夜に行ってきた。

睦美姐さんは江戸前のシャキシャキしたいい姐さんだった。心からの冥福をお祈りする。睦美さんのことに関しては「不逞者」（幻冬舎文庫）で 次のように触れたことがある。

参考までにここにその一部を記す。

そんなある日、部屋住みのベテラン山本が、上着もズボンも男のなり をした三十年配の女を連れてきたことがある。栃木刑務所を出所して、これから働くことになったのだが、ご覧の通り、着るものがない、という。 気の毒に思った睦美は、筆筒の引き出しの奥にたった一枚残っていた大島紬の着物を貸してやることにした。何かあったときのよそゆき用にと、一枚だけ残しておいた着物で、睦美が一番気に入っているものでもあった。

ところが、女はそのままトズラしてしまったのだ。

睦美は、みんなの前では平静を装ったが、悔しくてたまらず、万年と二人きりになったとき、

「ほんとうに大切にしていた着物なのに、それを・・・」とくやし泣きに泣いた。

すると、万年が言った。

「おまえね、着ていかれた者より、着ていった者の方がもっとつらいよ。」

他人の一張羅を着てトズラしなくちゃならない者の身になってみな。

どれだけ切ないか・・・」

睦美は、ハッと目を開かせられる思いだった。そういう見方があるんだ。この人は、そういう見方をする人なんだ・・・。

万年がこの世を去ってからだいぶたったある日、所沢の万年宅を訪れてきた見知らぬ男があった。二十歳ばかりの娘を連れた、旅芸人風の中年男であった。

男は、睦美の前に深々と頭を下げると、「旅いしております、ちっとも知らなかったもんですから・・・どうか、お線香だけでも上げさせてやってください」と、遺影の前に坐るなり、いきなり、はらはらと涙を落とした。そして、そのまま、じっと遺影を見つめ、やがて、娘といっしょに万感の思いをこめて瞑目し合唱した。「名のるほどのもんじゃござんせんから・・・」名も告げず、睦美に頭を下げ去っていったこの男が、いったい万年とどういう事情でどんな関わりを持ったのかはわからない。だが、ここにも一人、人知れず、万年のやさしさにふれ、それが忘れられないでいた男があったのだ。

睦美姐さんのご冥福を心からお祈りする。

2001/4/18 宮崎 学

考察：花井拳骨

『チエ』唯一のインテリ

「考察：小鉄」の中で、『チエ』には作品世界を一定の枠の中に保ち、常識と「品」を与える役割を持った人格者が登場しており、花井拳骨はその一人であると述べた。

『チエ』における花井拳骨の位置付けは、「インテリ」という言葉に象徴されている。

実際、花井拳骨は押しも押されもせぬ大インテリである。京都の帝国大学を主席で卒業し、中国文学（特に李白）研究の大家として名誉ある文化賞を受賞しているのだ。現在は孤高の学者として、文筆活動をしながら悠悠自適の生活を送っている。

拳骨は社会的にも尊敬されるべき立場にいるが、「世間」が花井拳骨を見る目と、チエたち西萩住民が「インテリ」花井拳骨を見る目はまったく異なっている。世間は、文学賞の受賞や週刊誌の記事といった外側しか見ていないのに対し、チエたちは拳骨の人格そのものを見ているからだ。

西萩住民が拳骨を「インテリ」と呼ぶとき、そこには、「庶民」がその称号を用いるときにつきものの微かな憎悪や軽蔑の意味合いはまるで込められてはいない。彼らは、こう言ってもよければ、拳骨を心から尊敬している。

「世間」との窓口

拳骨は、西萩という、ある意味で自閉的な共同体と、「外部」の一般社会（世間）とをつなぐ役割を担っている。花井拳骨という「窓口」を通して、チエの一家は彼らにとって「異質」な外部の「世間」との関わりを持つ。それは、裏を返せば、花井拳骨の存在が、われわれにとっては「向こう側」の存在であるチエたちとわれわれを結びつけるつなぎ目だということでもある。

たとえば、第2巻「テツの同窓会」の話を読んでもらいたい。そこには、拳骨のかつての教え子であり、テツやミツルの小学校の同級生でもある人々が出てくる。

会社での昇進や出世、世間の体面を気にする普通のサラリーマンである彼らは、ある意味でわれわれ読者と同じ側にいる、世間的に言えば「ノーマルな」人々である。

しかし、『チエ』の中では、彼らは徹底的に「異質」な外部の人々として扱われる。彼らはテツにどつきまくられて、ボコボコにされるのだが、拳骨もチエも、さらには花井渉さえもが、彼らがテツにどつかれるのを許すばかりか、それに歓声を送っているのだ。

そして、不思議なことに、われわれはこれを読みながら、テツにどつかれるサラリーマンたち（われわれと同じ側にいる人々）にはなんの同情も感じず、圧倒的にテツに共感するのである。

拳骨を通してチエたちが外部社会と接点を持つ話は他にもいくつかある。

その一つは、拳骨が「毎朝出版文化賞」を受賞したことを記念して母校の大学で開かれた講演会にチエとテツがついていった（連れて行かれた）ときだ。

もちろん、チエもテツも、大学を見るのも初めてなら、その敷地に入るのも初めてである。

二人は、拳骨の講演を聞いてもちんぷんかんぷんで、チエなどは居眠りしてしまう。

話は李白の研究に関するものだったから、チエが退屈で眠ってしまうのも無理はない。

（講演の内容はさわりしか書かれていないが、興味深い箇所もあるので、再び取り上げる。）

このエピソードからは、「世間」における拳骨の仕事の一端が垣間見れるわけだが、その仕事はチエたちから見てまったく異質な、まるで別の宇宙で行われているような代物でしかない。中学生の頃から拳骨とつきあいのあるヨシ江ですら、彼が李白の研究をしていたということを文化賞受賞の新聞記事で初めて知るのである。

拳骨の受賞は新聞にでかでかと載っていることからして、世間的には相当な事件と言ってよいだろう。しかし、西萩住民にとっては所詮別世界の出来事ではなかった。オバアはんやヨシ江が茶飲みがてら「センセ、おめでとうございます」と一言お祝いを言えば済むような話だったのだ。

拳骨が大きく世間の注目を集めたもう一つの出来事は、テツたちと警官とのラグビー試合の際、ケンカを止めに入って大乱闘になったのが大々的に雑誌で特集され、まるで「日本の国を相手にケンカした」ような書かれ方をしたときだ（第11巻「人気者 花井拳骨」）。

このときの記事のタイトルは「文壇の孤児 花井拳骨のバトルオブ西萩」であり、週刊誌のスクープ扱いである。これから推察するかぎり、花井拳骨という名前は世間的には相当有名らしい。この記事の後、花井家には記者たちが詰め掛け、大騒ぎになったとも描かれている。

しかし、この大事件についても、西萩住民たちは、多少驚きはしたものの、基本的にはどこ吹く風といった様子だ。テツが出版社に電話して金をゆすり取ろうとしたり、チエが拳骨の名前を利用して店の売上を伸ばそうとしたりするが、拳骨が「日本の国を相手にケンカしたみたいに」書かれたことが一体何を意味するのか、分かってはいない。

雑誌記事のニュアンスからすると、花井拳骨は社会的には「反体制知識人」に属する存在とみなされているようである。帝国大学時代に彼の論文を盗作した教授をフルチンで木にしぼりつけた

という強烈なエピソードからも、反体制、反権威の姿勢は十二分に伝わってくる。そんな花井拳骨だけに、マスコミにしてみれば、「警察とのケンカ」というのは格好の「ネタ」なのだ。レイモンド飛田が拳骨に選挙の応援演説を頼みに行ったのも（第12巻「選挙に向って」）、単に花井が「インテリ」だというだけではなく、彼が飛田のようなアウトローにも理解のある反体制思想の持ち主であるという知識があったからだろう。

拳骨の人生観

拳骨の愛する詩人李白もまた、当時の体制からはみ出して、孤高の中で芸術の世界に生きた知識人だった。もちろん無類の酒好きという点も共通している。

拳骨は「毎朝出版文化賞受賞記念講演」の中で、彼が李白に特別の関心を持ったのは、「横江詞 六首の其の五」を読んだことがきっかけになったと述べている。

これは、若き日の花井拳骨の人生観を垣間見ることができるなかなか興味深い作品である。次のような詩だ。

横江館前 津吏 迎え

余に向かいて東のかた海雲の生ずるを指す
郎 今 渡らんと欲するは 何事に縁る
かくの如き風波は 行く可からず

(口語訳)

横江館の真ん前で 渡し場の役人が出迎えて、
わたしに向かって 東の海に広がる黒雲を指し示す。
「だんな 今から渡りたいなんて 冗談じゃありません。
この波や風ではとても 渡れるものではありません。」

拳骨がこれを読んだときに感じた深い感動の真意は学の浅い私には窺うべくもない。ただ、ときあたかも昭和初期、全体主義の迫りつつある世相の中、権威主義的な息苦しい雰囲気の中で大学生活を送っていた当時の花井青年は、時代の重い空気を鋭敏に受け止める李白の感性に感じ入るところがあったのかもしれない。(原作から推察するに拳骨は大正デモクラシーの自由主義の息吹を味わいながら育った世代に属すると考えられる。)

なお、この「横江詞 六首」については、創作時期について専門家の意見が分かれているらしいが(青春期の作か晩年の作か)、拳骨はどちらの説を取っているのか、興味あるところではある。

体制側に反発しながらも帝国大学を主席で卒業した拳骨は、普通なら大学に残って研究者としての道を歩むのが当然であったろうが、敢えてアカデミズムの内側で生きることを拒絶し、西萩小

学校の一教員に赴任する。なんだか夏目漱石を彷彿とさせるエピソードである。（漱石と拳骨の間には他にもいくつか興味深い一致があるが、ここで詳しくは触れない。）

その西萩小学校で、拳骨にとって運命の出会いが待っていたのだった。

師弟の絆

小学校に入学してきたときから問題児だった竹本テツを、拳骨は「他の者には任せられない」といって、六年間担任をする。六年生のときに素行不良のテツを鑑別所に送ったのも拳骨である（少なくともテツはそう信じている）。おかげでテツは小学校卒業を鑑別所の中で迎えることになる。

テツと拳骨との絆は小学校で終わることはなく、拳骨は中学生のテツと、当時南海地区の花形リレーランナーだったヨシ江を引き合わせる「愛のキューピッド」となり、二人の仲の進展を見守った。拳骨、10年以上も付き合いながらも煮え切らない態度を取り続けるテツを、強引にヨシ江にプロポーズさせる。二人の仲人も務めた。

その後は、一時期距離を置いていたものの、ヨシ江に逃げられたテツのもとに乗り込み、二人に再び絆を戻させる。それからは周知のとおり竹本家にとってなくてはならない存在であり続けている。

拳骨はテツの人生の大半に関わっており、生涯を通じて保護者の役割を果たしている。一方、「愛弟子」たるテツは、師に対しては一見怒りと憎しみしか抱いていないように振舞っているのだが、心の奥底では、拳骨という「ストッパー」なしには「地獄に落ちる」だろうことに気づいてはいる（第15巻「トモダチって何？」）。

この師弟の絆は『チエ』という作品中でもそのユニークさにおいて異彩を放っている。この二人を主役にして一つのマンガが描けるほどだ。

拳骨のテツに対する気持ちがよく現われているのが、17巻「捨丸のオミヤゲ」に出てくる、拳骨が鑑別所のテツに送った手紙である。

拳骨は鑑別所にいるテツに毎日のように手紙を書いていた。テツが封も切らずに放り捨ててあったそれらの手紙を、じつに数十年ぶりに捨丸所長が届けてくれたのだ。

とても感動的な手紙なので、全文引用したい。

（引用はじめ）

三度読め！

昨日ワシはまんじゅうを食ったぞ
おまえも知ってるように
ワシの嫁さんの家はまんじゅう屋をやってるからな タダでなんぼでも食えるんだ
昨日食ったまんじゅうは つりがねまんじゅうといって お寺のツリガネの中に
アンコをいっぱいにつめたやつだ
うまかったなあ…
ほんまにうまかったなあ…
テツにも食わしてやりたかったよ

こんなにうまいまんじゅうをテツにやれんと思うと ワシはもう悲しくて悲しくて
ほんとになみだが出てしまったぞ

よく考えろ どおしておまえはこんなにおいしいツリガネまんじゅうを食べれないのだ
おまえが家にいてたら ワシといっしょにこのツリガネまんじゅうが食べれたんだぞ

早く帰ってこい そこでツリガネまんじゅうが食べれるか
こんなにおいしいツリガネまんじゅう……
ほんとにおいしい……こんなにおいしい……

テツ早く帰ってこい……

(引用おわり)

拳骨の妻

拳骨には、12年前に先立たれた妻がいる。彼女は、拳骨以上にテツのことを可愛がっていた。
テツも彼女のことが好きで、拳骨がいないときに家によく遊びに行っていたらしい。

テツがヨシ江と付き合っているのを誰よりも喜んでいたのは拳骨の妻だった。ヨシ江なら自分が
亡き後も安心してテツの面倒を委ねられると思っていたのだろう。彼女は、拳骨がテツに暴力を
振るうことには反対していた。テツによれば、彼女は死の床にあってさえ、拳骨にテツを殴らな
いよう頼んだという。(15巻「アルバムを見るときは落ち着かない」)

拳骨にとって、愛妻を失ったことがどれほど身心にこたえたかは想像に難くない。拳骨がもとも
と好きだった酒に一層深入れすることになったのも、妻の死と無関係ではなかろう。もしかし

たら、拳骨のテツに対する執着は、妻の思い出への執着でもあるのかもしれない。
学問上の師に裏切られた経験を持つ花井が、畢生の名著『李白小伝』を捧げたのは、あるいは亡き妻に対してではなかったか？

かつて、鑑別所に入っていたテツを花井の妻が訪問したとき、テツは記念撮影するために所長も含め鑑別所の全員をカメラの前に並ばせたという。（15巻「花井恥かしアルバム」）

写真の真ん中には得意満面のテツと花井の妻が並んで立っている。この写真が、生前の彼女の面影を偲ばせるわれわれにとって唯一の手がかりである。

どことなくヨシ江に似ていると思うのは私だけだろうか…。

コケザルと僕

先週の日曜日、上野でコケザルに会った。

アメ横を歩いていると、頭の右上のあたりが凹んだ特徴のある頭をした年の頃30前後の男がパチンコ屋から出てくるのが目に入ったのだ。スーツ&ネクタイ姿に丸刈りというのはどう見ても堅気の格好ではない。もしやと思いおそろおそろ声をかけてみると、やはりコケザルであった。

僕は自分がフリーの物書きであること、興味深い人物のインタビューを雑誌に連載していることなど簡単に自己紹介した。

立ち話も何だから、喫茶店でということになり、二人で「マイアミ」に入る。

窓際のカウンターに二人で腰掛け、アイスコーヒーを頼むと、僕は話を切り出した。

「感激です、こんなところでお会いできるなんて。小学生の頃からずっとファンだったもので」

「俺を知っている人から声かけられるなんて何年ぶりかなあ」

言葉は標準語だが、イントネーションは大阪弁である。

「今は東京にいらっしゃるんですか」

「そうなんですよ。ちょっと色々あって、あっち（大阪）に居づらくなってしまったんで」
左手で後頭部を掻きながら、きまり悪そうに答えるコケザル。

丁寧な標準語を関西弁のイントネーションで話す、一見強面ではあるがどちらかというとシャイな印象の大人のコケザルというのは、最初は妙な違和感があったが、話していると次第に自然に思われてきた。彼には独特の、相手の懐にスッと入り込んでくるような雰囲気がある。それでいて、どこか他人を飲み込むような威圧感というか貫禄も備えている。漫画のイメージとさほど遠くない印象を受ける。

僕「東京では何を？」

コケザル（煙草に火をつけながら）「色々やってますよ。今は金券ショップとレンタルビデオ屋やってます」

僕「アルバイトで？」

コケザル（笑いながら手を振って）「経営ですよ」

僕「えっ?!」

僕が小学校5、6年生の時にテレビで見ていたコケザルは小学校4年生だったはずだから、彼はおそらく僕より1歳か2歳年下ということになる。なかなか立派な身なりから察するにフリーターとは思えなかったのは事実だが、まさかこの歳で店を二つも経営しているとは。僕は驚きを隠せなかった。

彼の近況を聞いているうちに、彼が経営する店は二つどころか、都内に十数カ所のチェーン店を持つレンタルビデオ屋であることが分かった。さらに新宿と御徒町の雑居ビルに店を構える金券ショップの経営にも携わっているという。はやくもいっばしの青年実業家といった風情だ。会話は自然と年上の僕がへりくだる口調になっていた。

コケザルの東京での商売の話はとても興味深いものだったが、スペースの都合でここでは割愛する。それ以上に僕が興味を持ったのは（読者も多分そうだと思うが）、コケザルに大阪で一体何があったのか、そしてチエやテツたちは今どうしているのかということだった。

しかし、それについてはなんとなく話したくなさそうなコケザルの気分が伝わってきたので、質問を発するのをしばらくためらっていた。とはいえ、せっかくの機会だ。ここで聞かない手はない。それに、話したくなさそうだというのはこちらの思い過ごしで、実は話したがっているのかもしれない。いずれにせよ、これはかなりのスクープ記事になると僕は踏んだ。いくつかの企画が頭に浮かんだ。その中には「実写版 ジャリン子チエ」の企画もあった。もちろん主役は目の前にいるコケザル。あとのキャストもなんとかなるだろう。とりあえず、ジャイアンツの桑田には「余所見君」の役で交渉してみよう。

しばらく沈黙が続いた後、勇気を出して僕は尋ねた。

「西萩には今も行かれたりするんですか」

「え？」

不意をつかれたようなコケザル。

「竹本チエさんとは今でもお会いになることあるんですか」

コケザルは飲みかけのアイスコーヒーを一気に飲み干した。彼が一瞬眉をひそめたのを僕は見逃さなかった。

気まずい沈黙が流れた。

コケザル「おたく、今晚は大丈夫？」

僕「え？」

コケザル「どうですか、一緒に晩飯でも」

どうやらここでは話したくないということか。

正直言って少し怖いような気持ちもあったが、こっちだって仕事である。この機会を逃してはいけないと思い、ついていくことにした。

取材費ということで、コーヒー代は僕が払った。

コケザルはタクシーを呼び止め、二人で乗り込んだ。

タクシーの中では二人とも無言だった。コケザルはぼんやりした目で遠くを見つめていた。

行き先は銀座の高級料亭である。

取材費ということで、タクシー代は僕が払った。

夕食にはまだ早い時間だったので、空いている店内の座敷の一角に腰を落ち着けた。

僕はこんな高級な店で食事することはほとんどないのだが、コケザルはいつも来ているような様子で女将になにやら言いつけていた。

食事が始まり、話はまたコケザルの商売のことに戻った。酒が入るとコケザルの口調は急になれなれしくなり、自分の呼び方も「俺」から「ワシ」に変わった。

僕は先ほどの質問をはぐらかされたように感じ、延々と続く仕事の自慢話に不満ながらも適当に相づちを打っていたが、ある時点でとうとうたまらなくなり、話をさっきの質問に戻そうとした。

「ところで、子供の頃のことなんか、今でも思い出したりなさるんですか」

ビールを飲むコケザルの手が止まった。

僕はここぞとばかり一気に畳みかけた。

「『ジャリン子チエ』といえば、僕らの世代では知らない人のいないメジャーな漫画です。特に僕なんか小学校の頃は大阪にいましたから、すごくハマってました。『ジャリン子チエ』のない少年時代なんて考えられないくらいです。コケザルさんのセリフもほとんど覚えてます」

「よかったなあ、あの、コケザルさんがヤクザにやられて、テツさんたちと一緒にリターンマッチをやる話。根性あるなあと思いました。ああ、あれもよかったです、鑑別所の同窓会にチエさんと一緒に行く話。店の前にでっかい狸の置物があるんですよね…。あとレイモンド飛田と組んでやったお化け屋敷の話とか」

「…僕の友人が先日、大阪に行ったついでに、西萩に寄ったんですよ。そしたら、あのホルモン焼き屋もお好み焼き屋もなかったなんて言うんです。小学校はあったんだけど、花井という名前の先生はいないということでした。僕は、そんなはずはないって言ったんですけど、友人は確かにそうだって言うんです」

「実は、僕も近々西萩に取材に行こうと思ってたんです。＜あの漫画の舞台は今＞っていうシリーズ物の企画で。面白くなりそうだったらテレビにも持ち込もうと思ってまして。もし、コケザルさんにもご同行願えれば、かなりいいものになると思うんですが…。手始めに、独占インタビューなんかいかがですか。仮タイトルは『コケザル激白！「ジャリン子チエ」の真相——今だから話す、俺とチエの真実』」

コケザルは黙々と料理を食べながら無表情に聞いていた。

ちょっと調子に乗りすぎたかな、とも思ったが、言ってしまったものは仕方がない。僕は一ファンとしての純粋な善意から申し出たのだ。誠意は伝わったに違いない。あとはコケザルの反応を待つのみ。

やがて、箸を置いてうつむいたまま、ポツリと吐き出すようにコケザルがつぶやいた。

「……コケザルって誰や」

「？」

「ワシはコケザルとちゃう。『ジャリン子チエ』なんか読んだこともあらへん」

咄嗟に（嘘だ 彼は何かを隠している）と感じた僕は、さらに追い打ちを掛けた。

「じゃあなんで僕がアメ横で『失礼ですがあなたはコケザルさんですか』と声を掛けたときに肯定したんですか。それに、喫茶店で僕が竹本チエさんについて聞いたときに、なんで僕を晩ご飯に誘ったんですか。…本当は何か話したいことがあるんじゃないですか？ 言ってくださいよ、コケザルさん。ここまで来たら、何も遠慮することなんかないじゃありませんか。それとも、何か聞かれては困ることでも？」

うつむいたまま一点を見つめるコケザル。

「帰る」

コケザルはそう言って立ち上がり、店を出ようとする。

「待ってください、コケザルさん！ あなたがコケザルだってことは分かってるんだ。こうなったら正直に、何もかも話しましょうよ。一緒に大阪に行きましょう！ もう一度西萩の町を歩きましょうよ、二人で！」

少し酒の入っていた僕は、酔いの勢いにまかせてかなり大きな声で叫んだ。

コケザルは逃げるように走って店を出た。こんな捨て台詞を残して。

「ワシ、西萩なんか行ったこともないわ！ …だいたいそんなところあるんか？ 大阪には20年以上暮らしたけど西萩なんてゆう地名聞いたことないぞ！」

料亭での食事代は、当然一人残された僕が支払った。取材費ということで。

僕は今でも、彼がコケザルだったことを確信している。

コケザルを捜し出さなければ。

つづく (?)

じゃりん子チエについての考察

<http://p.booklog.jp/book/70029>

著者 : ミナミの民

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70029>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70029>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ